日向遺跡調査報告書

第二輯

宮崎県教育委員会

昭和三十年四月

日向遺跡調査報告書

第二輯

宮崎県教育委員会

正誤表

誤		正
二二頁	一行	トンボ玉の一積。
〃	一五行	緑。部
二八頁	一四行	日向には
四六頁	一〇行	殆んで。
五九頁	四行	磨。製石斧
八一頁	一五行	剣光。形
八二頁	五行	幅。二。
八四頁	二行	幅は一糎。位い

正
トンボ玉の一種。
緑。部
日向中。部。には
殆んど。
磨。製石斧
剣先。形
幅二。。一。糎
幅は一米。位い

目次

第一部　福島町銭亀塚調査報告

第一章　調査の経過　日高重孝　一

第二章　地理的観察　吉野忠行　五

第三章　銭亀塚　石鏡川山恒太郎猛　一六

第四章　王子谷住居址　石鏡川山恒太郎猛　二六

第五章　王ノ山古墳　瀬之口伝九郎　三三

第二部　日の影町新畑洞穴遺跡及大溜包含層調査報告

第一章　調査の経過　日高重孝　四三

第二章　新畑洞穴遺跡及大溜包含層　石鏡川山恒太郎猛　四五

第三部　日向市鈴鏡塚調査報告

第一章　調査の経過　日高重孝　六一

第二章　鈴鏡塚　石鏡川山恒太郎猛　六二

キヤビネ写真版　三二葉　実測図　六頁

第一部　福島町錢亀塚調査報告

第一章　調査の経過

○調査事由

昭和二十八年一月二十三日から、同二十九日に至る約一週間、日向遺跡調査団の第二回行事として、左の二遺跡の発掘調査を行つた。

一、南那珂郡福島町大字西方銭亀塚

一、同　　大字穂佐原王子谷遺跡

福島地方は、建久図田帳に櫛間院三百町と記された、所謂日向八院の一つで、有明湾に面する、風光明媚な、日南の一要地である。

鎌倉時代以降、島津氏に属し、野辺氏が地頭として領していたが、戦国時代には、一時、肝付、伊藤二氏の領となり再び島津氏に帰したのを、秀吉の西征後、九州諸侯の分封によつて、高鍋藩秋月氏の下邑となつたものである。

由来、この地方には古墳多く、中にも、剣城塚（前方後円墳）清見塚（前方後円墳）万多城塚（前方後円墳）霧島塚（大円墳）毘沙門塚（円墳）及び銭亀塚（円墳）が世に知られている。銭亀塚は福島中町の西方十数町の丘陵上に在りその名称は亀形を成しているためか、或は曽て、古銭を容れた瓶を出したためか、何れかであろう。

次に王子谷遺跡は、従来、王之山遺跡と称せられているが、現時、王之山という地名は穂佐原地方に存しないので、王子谷の名称に従うこととする。今から凡そ百三十五年前の文政元年二月、この地の百姓佐吉なるものが、その所有

の王之山古墳から鉄器三十余片と共に穀璧を掘り出したのを、明治十年頃、探険家松浦武四郎から入手したと、前田元公爵家の記録に残つているものである。

穀璧（或は蒲璧）は、周代の子爵（或は男爵）の表象としてあるもので、かゝる珍器を副葬する本墳の主人が相当有力な人物であつたことが推考せられる。或は文政年中発掘時の残遺もあらんかとの予想の下に、この度の発掘調査が試みられた次第である。

○調査団組織

今回の遺跡調査団の組織は左の通りである。

団長	宮崎県教育委員会教育長	野村憲一郎
副団長	同　社会教育課長	金田智成
同	県文化財調査委員会議長	日高重孝
調査委員	九州大学文学部	鏡山猛
同	県文化財調査員	瀬之口伝九郎
同	同	石川恒太郎
同	妻高等学校教諭	吉野忠行
幹事	県社会教育課管理係長	佐藤勝信
同	同主事	寺原俊文
同	福島町教育委員会	河野史朗

参与　福島町長　神戸俊一
同　福島町教育委員長　宝珠山忠男

○經過概略

廿四日、晴。

午前九時、調査団、町役場員、地方教育関係者一同、銭亀古墳前に集合、修祓を行い、町教育委員長鍬入れ、野村教育長玉串奉奠、式終りて直に発掘を開始した。

先づ墳丘上に東西四米南北二米のトレンチを入れ、掘ること二十糎で石廓次第に顕はれる。西側と北側は石積み整然としているが、南側は石積み乱倒し、東側は境界不明である。

石廓は幅八十糎、長二米半で、やゝ薄い山石を巧みに平積みした形式であるのは珍らしい。底部から銅鏡破片、鉄鏃ガラスの青小玉二十九個、丹・緑・白の三色丸玉一個（琺瑯質）、銀環一個を次々に出土した。

別に墳頂から北側に向い、東西三米、南北二米のトレンチを入れ、発掘を行つたが、何物をも獲なかつた。

村民の語る所によれば、この丘上は十五、六年前までは杉山であつたのを伐採して畑地となした際、石廓の一部を発いたとのこと。目ぼしい出土品の少いのはそのためか、否か。

本日、人夫五名。午後、当地の高等学校、中学校の生徒等多数見学した。

廿五日、晴。

午前十時、調査開始、本日は人夫を使用せず、団員のみで、昨日発掘の跡を整理する。

午前中に青小玉七個、鉄鏃数片と朱を交えた土塊などが出で、午後、東部に、鉄鏃の一塊を発見する。五時、終業。

廿六日、雨。終日閉居。

廿七日、雨。午前中、穂佐原に百姓佐吉の墓を発見した松田禎雄氏来宿、王子谷遺跡に就て語るを聴く。

廿八日、晴。

午前九時、王子谷遺跡前に団員、神戸町長外有志一同集合、修祓の後、調査を開始する。現地は一面に籔しげり、踏石数個並べた入口らしい所に注連縄が廻らしてある。先づ竹籔を伐り払い、人夫五名及び団員にて掘り進む。その間、土師器の破片、フイゴの破片、茶碗鉄げなどを出し、表土下五十糎にして、東西二米、西北五米ばかりのコの字形の石囲を発見した。併しながら、上述数品の外、何等考古に資する出土品のなかつたのは遺憾であつた。

右の石廓は、福島地方誌に、周代璧玉の出た遺跡として『東西一間、南北二間の石囲あり』と記すものに当るようである。而も、何等獲得する所のなかつたのは、文政の当時、既に全部取り尽したものか。或は又、真の遺跡は他所に存ずるか、穂佐原の佐吉墓附近にもそれらしい個所があると聞くので、更に後日の調査研究を要するであろう。

尚、本遺跡の東側に隣接の畑地（ヲツガノ四四七番）に弥生式土器の破片が多く散在するので、二ケ所にトレンチを入れて、掘り試みたが、完全な土師器一個（径十三糎）と鉄滓の一塊とを出したのみであつた。この鉄滓は、先述のフイゴの破片と関連あるか否やは不明である。

廿九日、晴。

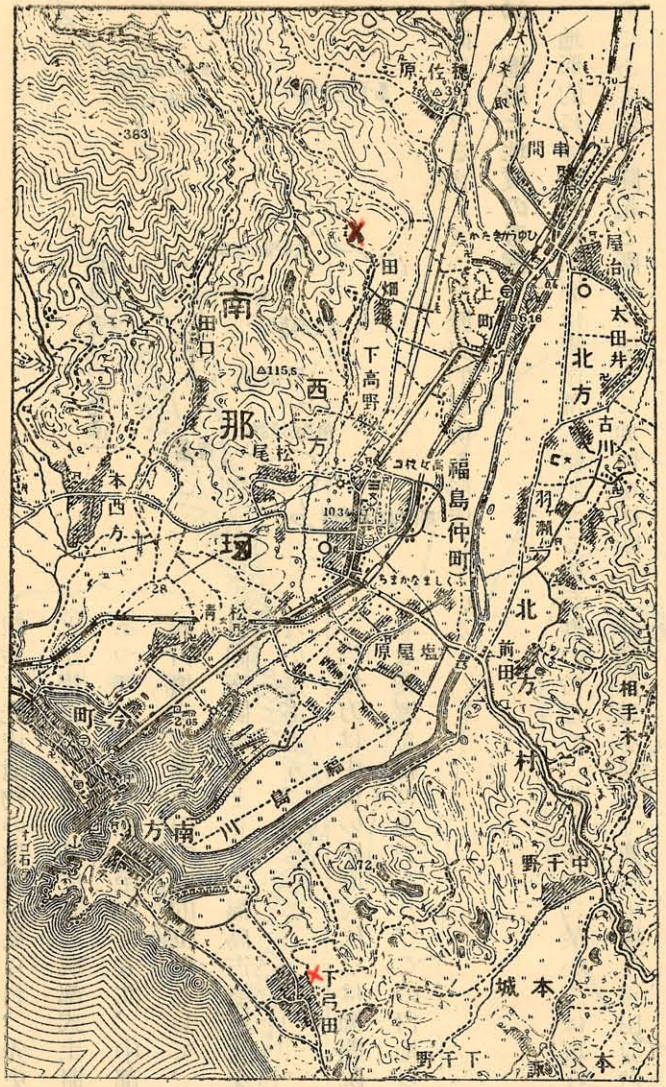
前二遺跡の整理と復旧。（**日高重孝**）

以　上

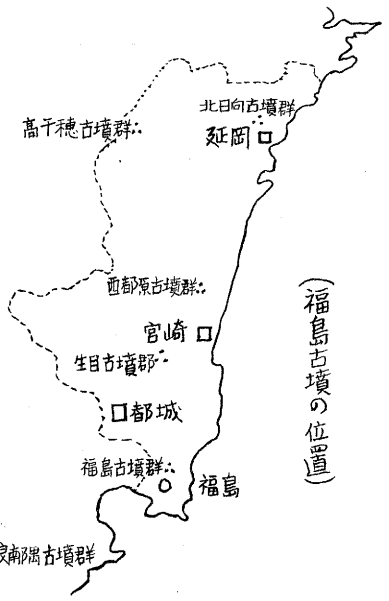
第二章　地理的観察

(一)　地理的位置

今回調査された銭亀古墳は、日向の最南端、福島沖積平地の西方、善田原に在つて、北西部は鰐塚山地に接し、南部は有明（志布志）湾に臨み、東南部は低山性の都井岬に連互する鹿鳴山塊を望見する風光の卓越する景観の地で、本古墳は、海抜凡そ三〇米位の低平南傾の洪積層台地の頂上部に位置し、偏西季節風が強く当り風化作用を甚だしく受け得る条件を有している。



銭亀古墳の外に、附近一帯には約五基位の古墳が点在していたと聞くが、現在は開拓が進み殆んど耕地化されていて、その原形の確認され得るものはない然し、此の台地一帯の巡検に依れば、台地東縁部に亘つて貝



（福島古墳の位置）

塚並に先史遺物の散布が見られ、先史地理的考察の対象地域となることが出来る。更に弥生式、祝部式土器の破片も所々に発見されるのであつて、古墳時代に至つても北、中部日向の古墳文化圏と、串良、大隅古墳文化圏との中間的位置として、之等と有機的に関連ある、所謂日向南限地帯としての福島古墳文化を形成していたと考えても差支へないであろう。

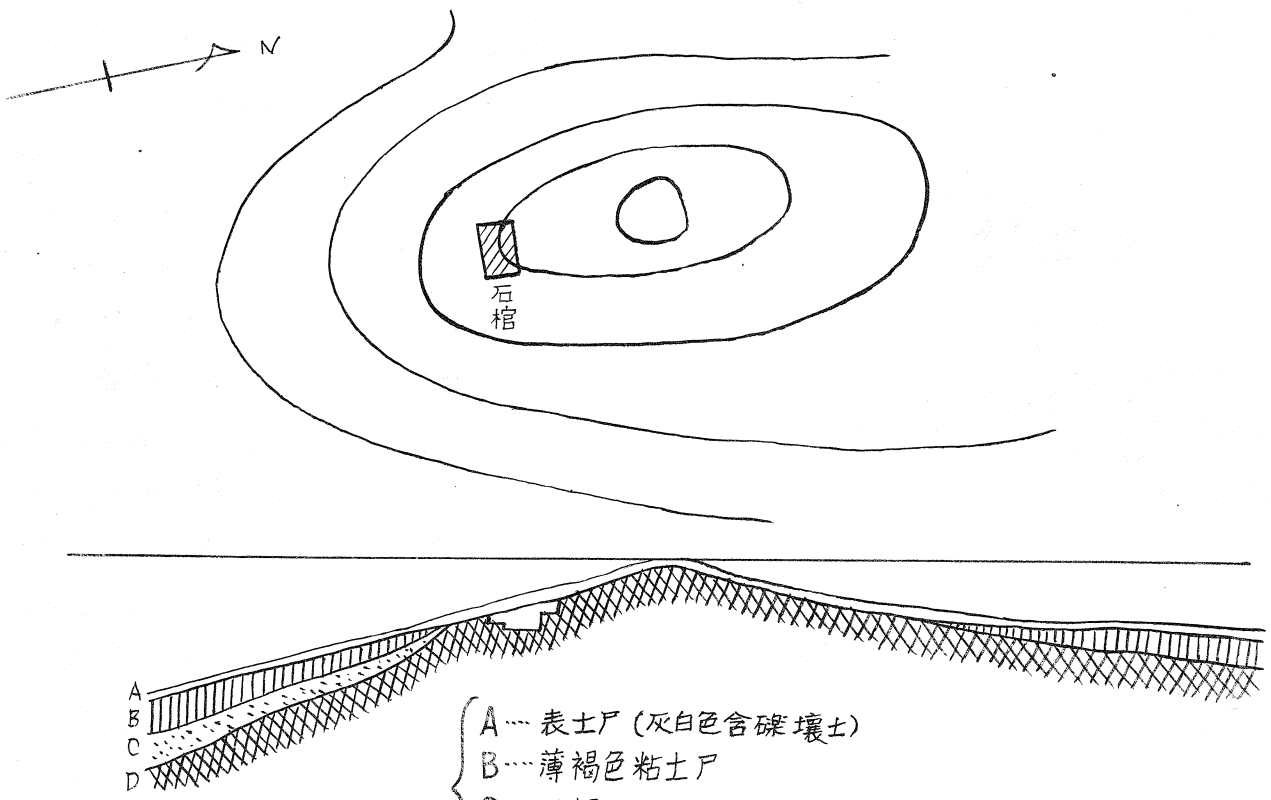
当地方は中世の庄園時代には櫛間院と称せられ古来、歴史的にも様々な変遷を経た地であり、この台地以外には古墳も二十数基を数え南日向に於けるまとまつた歴史的環境を形成している。

(二) 地形と地質の考察

地形的には西方善田原は東南部に傾斜する隆起性の台地で、先史時代に於いては現在の福島平地は湾入をなしていたのであるが、隆起と断層に依つて地体を切断し、沖積低地を挟んで鹿鳴山塊と善田原台地を形成したことは明かであつて、福島川と善田川に沿つて、旧砂丘列乃至河岸段丘が発達し、現在はその上に上町、仲町の中心市街の集落を成立させ、下流水域には今尚お低湿地帯の痕跡を留めて複雑なる水郷景観を呈している。

従つて善田原東縁辺に沿つては貝塚を散見し、低沖積地を界として両側の山地又は丘陵面には先史遺物包含層が分布している。

恐らく此の丘陵及び延長山麓段丘上には先史時代に引きつゞく古墳時代にも古代集落を発達せしめていたことは地形



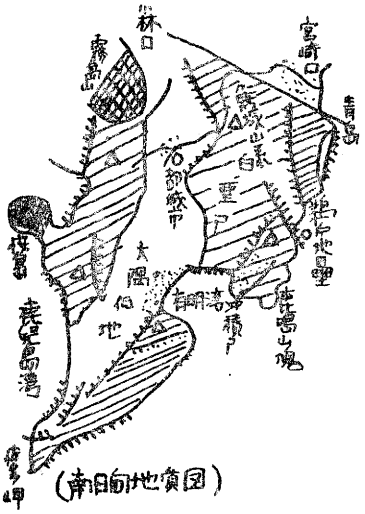
（銭亀古墳の地質、断面図
石棺の位置を中心として）

的諸条件から考察され得るのである。尚お仲町を中心として数基の古墳がある。

地質的には鰐塚山系及び鹿鳴地塊は共に中生代末期の白堊紀層で、断層作用と隆起を伴い乍ら山麓階成生の形で形成され志布志湾を越えて南大隅の花崗岩ホルストに続いている。善田原も其の一環として出来上つた台地である。勿論、その間に位置する福島低地は隆起性の沖積層である。

銭亀古墳は善田原丘陵の中心最高地点に位しているが、表面壌土は殆んど侵蝕削剝され、赤褐色礫石を以つて極めて薄く覆われ、岩盤層が表土に近接している状態で、従つて発掘された石棺も一部露出していた。

農耕地としての開拓の為め人為的にも古墳は原形を失うまでに破壊されており、独立墳の様相を示してはいるものゝ此の附近一帯には尚お幾つかの古墳が存在していたにも拘らず、いつの間にか、此の様にして烟滅して了つたのであろうと思われる。



(三) 地理的構造の考察

銭亀古墳の原形を、石棺の位置と、現在の墳丘地形上から復元的に其の構造を考察してみれば、凡そ次の二つの場合が想定される。

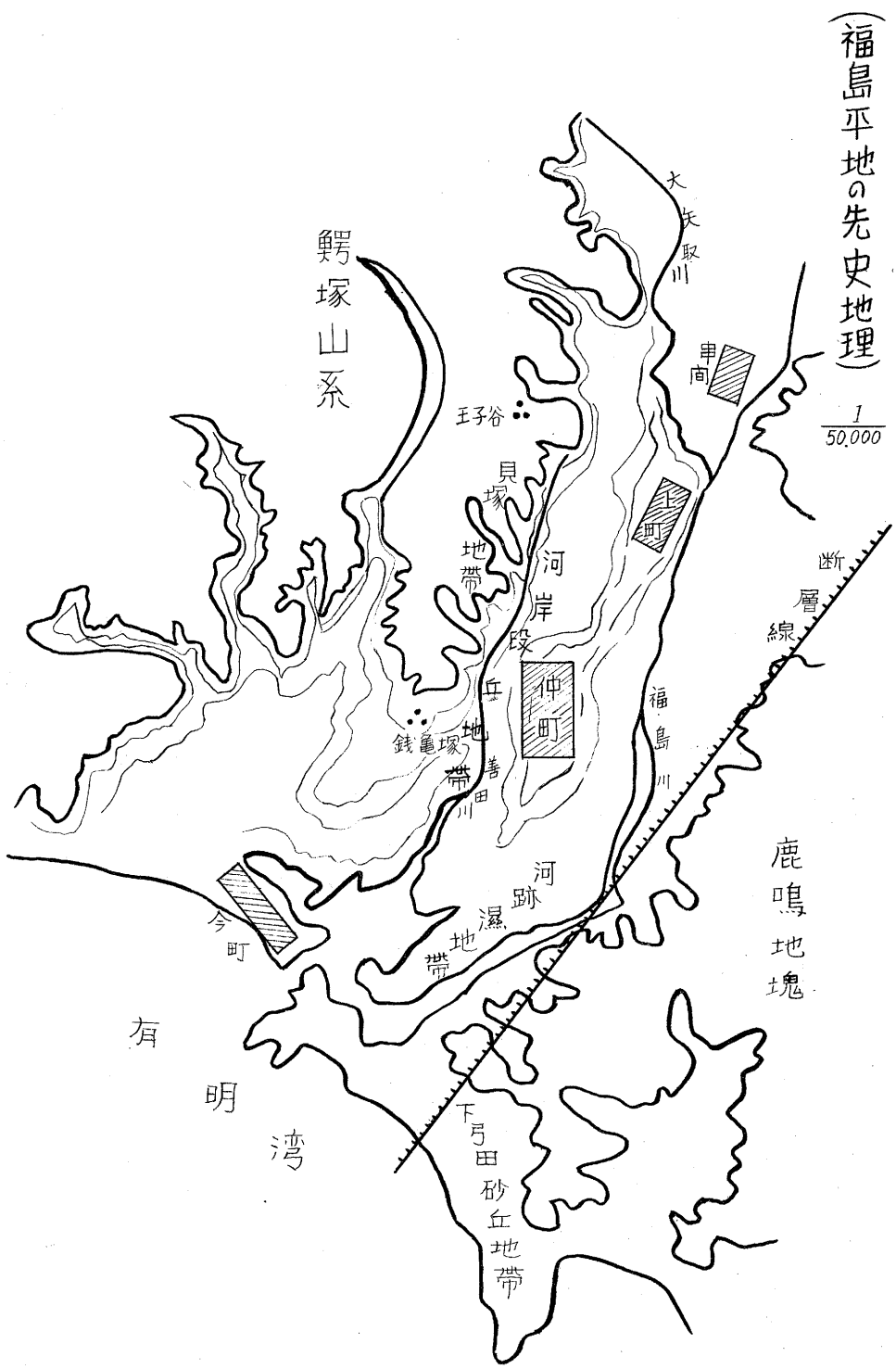
(1) 石棺の位置は、墳丘の中心部であるか否か。

(2) 自然の丘陵の南部斜面を利用したものか。

現在の墳丘は開拓されて畑地となつており、且つ、自然の侵蝕作用を受けて表土は甚だしく削剝攪乱され石棺蓋の平

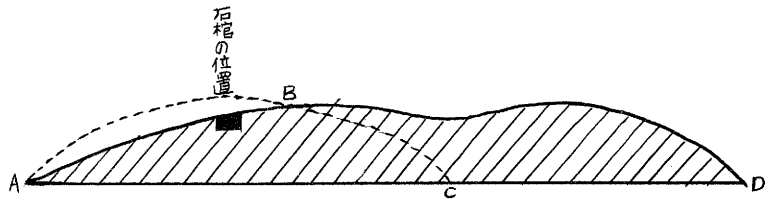
（福島平地の先史地理）

1/50,000



宮崎県立図書館

(銭亀古墳実測図)



（錢亀古墳の断面図）

形石の一部が既に露出していた。古墳の位置は台地に於いては最高地点に在つて眺望が優越していることから、此の丘陵の南部斜面に石棺の場所を定められたものとしても決して不自然ではない。

地層的にも単純で、岩盤の表土近接性からみても、石棺の埋設深度と比較して、封土の厚深度が多いとは認められないのである。

此の様に考えて来れば(2)の場合が確実性を有つことになる。仮りに若し、石棺の位置を墳丘の中心部とした場合は、点線A、B、Cの様な原形をとらねばならぬことになるが、現地形A、B、Dや、地質的判定上からは、この形状はとられ得ないのである。

更に検討せねばならぬことは、今迄に発表されている当該古墳の形状を「瓢たん型墳」としてある場合が多いのであるが、若し、前方後円墳的形をとるとしたとき、外見上は、現地形的に斯様に見られても、地理的構造の分析の結果は妥当性を缺ぐのであつて、綜合的に結論すれば、自然丘陵突端部の展望景観に優れた南部斜面の日当りにも恵まれた地点を利用し多少の人為的な変形による円墳的形式の古墳と断定するのが最も適切であると考えられるのである。（吉野忠行）

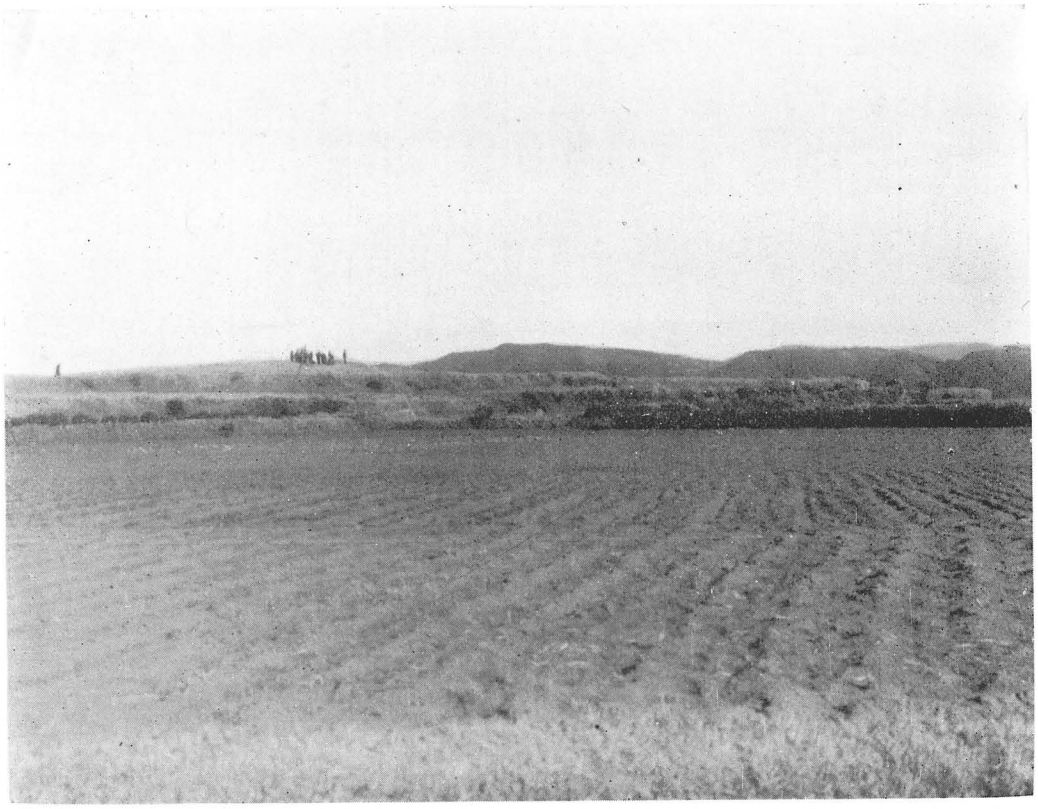
第三章　銭　亀　塚

銭亀塚は福島町大字西方字善田原にある。この古墳は自然の丘地を利用し、最初予備調査を行つた際にこの丘地の頂上から稍々南に降つた所に石棺の一部が露出していた。昭和二十八年一月二十四日、この露出部を中心にして東西四、五米、南北二米のトレンチを入れ、表土を除くと忽ち石棺に到達した。それで更に北方に一米、東部及び南部に各一米を拡げて石棺の全形を出した。発掘の途上に於いて銅器破片、鉄鏃破片及び須恵器破片等を掘り出したが、これらは石棺の形状が明かになると鉄鏃を除いては何れも石棺の外側に在つたことが知られた。石棺の形状は図版に示す通りであつた。

石棺は東西に略ぼ正確に方位し、棺の内側の広さ東西三米、南北約七十糎で、棺の東部は石棺が破壊されていた。ついで棺底を精査した結果ほゞ中央部より釘、東部より丸玉、小玉、銀環、鏃等を発見した。その棺中に存在した状況は図版及び写真によつて見る通りであるが、概説すれば、釘は棺の西壁から東方一米五センチ、北壁から三十糎の場所に在り、丸玉は西壁から東方二米六六糎、北壁から三五糎の位置にあり、銀環はその西北一〇糎の位置にあり、小玉はその附近二〇糎四方の所に散乱していた。又鉄鏃は銀環の西方一五糎の位置に一個、丸玉の南方二五糎の所に一束となつて棺底にサビ付いていた。以下これらの遺物について詳記すれば次の通りである。

A、石　棺

石棺は前に記したように、東部は石積が失われていたが、東西三米、南北七〇糎で、深さは最深部四〇糎あるからこれが原形と見て良いであろう。この石棺は日向国に於いては珍らしい形式で、扁平な石を立てゝ使用せず、石垣を築く



銭亀塚全景

発掘直前の石棺

平石積式石棺の内部

仝　　上

ように、これを扁平に積み重ねて棺の側壁を形成している。つまり深い所は石を四重、その他も二重或いは三重に築いている。この種の石棺は北九州地方ではこれを平石積式石棺と呼んでいるという。次ぎに石棺には底石を用いず、底は粘土質の土を堅めて造られている。更らに注目すべきは蓋である。この石棺には蓋はなかつた。或いは開墾の際に蓋石を剝ぎ去つたのではないかと思つたが、七十糎の幅を差し渡すような大きな石は附近に全く見出すことができなかつた従つて蓋石は無かつたものと考えねばならない。然し蓋の無い筈はないのであるが、こゝに注目すべきは積石の構造である。それは平面図に見られるように、一番上の石はその下の石より五糎位い引つ込んでいることが知られる。これは原形がその侭保存されている西側及び北側の石積に見られるところであつて、この石積みの特殊な装置は、この上に蓋を載せるためのものであろうと思われる。そうすると、釘の存在と共に、この石棺の蓋は木製であつたのではないかということが考えられるのである。

そこでこの石棺は、石室すなはち石槨なりや石棺なりやということが問題となる。その形状はこの中に棺を入るゝ石室に似ているが、大きさは普通の石棺と殆んど同じで、直接に死体を容れるものゝようである。尤も蓋が無いから木棺を中に入れたのではないかという考察も、丘の頂上から少しく降つた所に位置している点と併はせ考えて、一応考え得られるが、石積の構造から見て木の蓋を考えられるとすれば、やはり石棺と見ることが妥当のように思われる。

日、丸　玉

丸玉は唯一個存在した。図の如く、直径一、一糎、高さ〇、八糎の丸で、中央に直径〇、三糎の穴が貫通している。そして表面には右肩から左裾にかけて赤、白、青、黄、青、白、赤というように繰り返す斜曲線が色鮮やかに描かれている。そして赤は色幅がやゝ広く、青は線が狭くて二筋入り、その青と青の中間は黄色があせている。何にしても美事

な細工で象嵌的手法が施こされている。これは所謂トンボ玉の一積であり、日向に於ける最初の出土であろうと思う。

C、銀　環

銀環は非常に細い。環は空洞でなく、やゝ扁たい純銀棒を曲げたもので、棒の直径は〇、二糎、環は鍬か何かを打ち込まれたらしく曲つているが、長径二、二糎、短径二糎の楕円状をなしている。原形は径二糎であつたものと思われるこれも只一個しかなかつた。

D、小　玉

小玉は碧色の硝子小玉で、その数三十六個を得た。もつと多かつたであろうが、東部は前に書いたように石棺が壊れていたので流れ去つたのか、見残したとしても多くを見逃したとは思われないから流れ去つたものと考えられる。

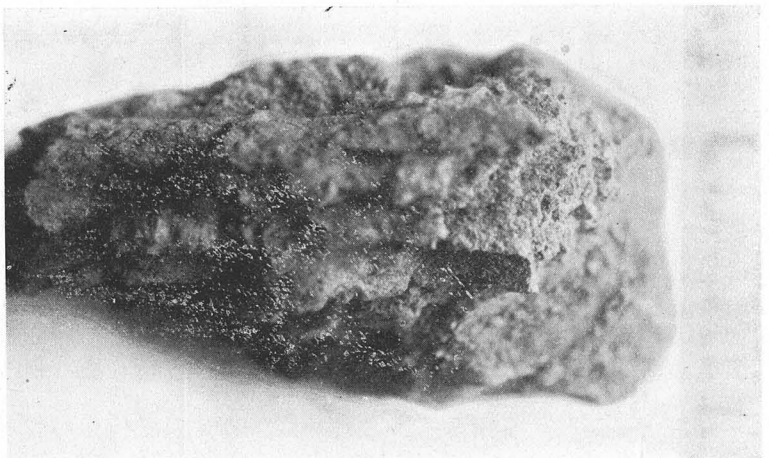
E、鐵　鏃

鉄鏃は銀環の西方に一個と、その南方に十数個が一束となり刃を東に向けて棺底にサビ付いていた。この鏃が棺底の土にサビついていたことから見ても、この棺に底石が無かつたこと、及びこの部が余り荒されていなかつたことを知ることができる。鏃は劔頭形のものが多いようであつた。

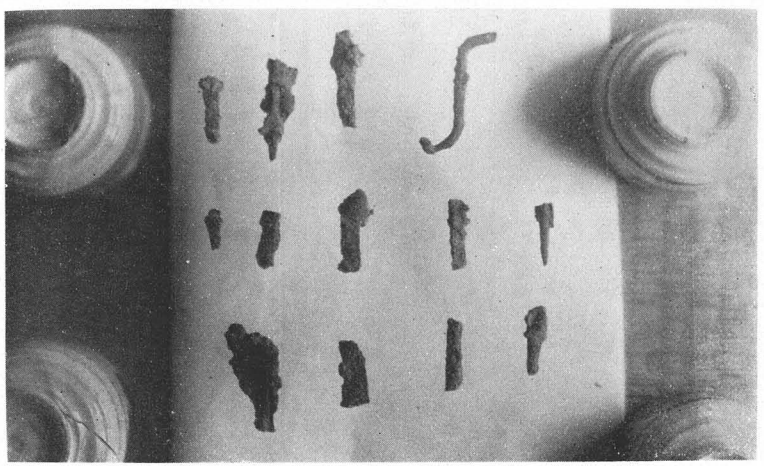
F、銅　器　破　片

銅器の破片は極めて小さく、長径二糎、短径一糎のやゝ三角形で、一方の縁は厚さ〇、二糎で湾曲し、他の方は薄い一部に緑青を生じ全体としては赤色を呈している。鏡の縁部と見られるが、鏡とすれば倣製鏡で、緑部の湾曲を延長して見ると、直径四、七糎位いの極めて小形の鏡となる。たゞしこの物の存在した場所が棺の外側であつた事実から見て果してこの石棺内に在つたものであるか否かは明らかでない。

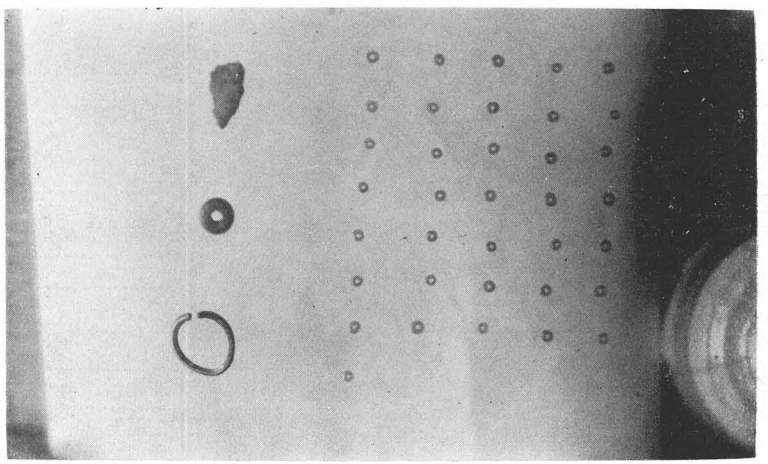
鉄 鏃 出 土 状 況



鉄　　鏃



鉄　鏃　破　片



丸 玉、銅 器 破 片、銀 環、小 玉

G、釘

釘は唯一個の破片でサビ朽ちてその形状を明らかにし難かつた。

H、須恵器破片

須恵器はこの古墳の外部地上に多数散布しているのが見られた。これは石棺の北側の石の上に在つたもので杯の破片のようであつた。

以上によつて見るに、この古墳に葬られた人は棺の東を頭にし、西に足を伸ばして葬られたものと思われるのであるたゞ棺の中央部以西は棺形が比較的良く残つていたのに、その部分からは何らの遺物をも発見することができなかつたことは不思議で、耳飾りと思われる銀環が一個しか無かつたこと、鏡の破片と思われるものが棺外の石の間に、しかも比較的表土に近く存在したことなどの点から或いは前に盗掘されたのではないかという疑いも生ずるわけである。兎に角、美くしい丸玉や硝子小玉を有し、銀の瀟洒な耳飾りをしていた点から見て身分の高い女性の墓ではないかと想像されるわけである。

最後にこの古墳の原形の問題であるが、地元の人々の語るところによれば、もとこの古墳は二つの土饅頭形をなし、そのくゝれた中央部が通路になつていたということであつた。それで前方後円式か或は瓢形墳ではなかつたかとも想像されるのであるが、発掘の結果現われた石棺は非常に整つたもので、他にはかゝる石棺の埋没している所はこの丘上にはないことがボーリングやトレンチを入れて明かとなつたから石棺は一個であり、しかもその位置が自然の丘を利用して、丘の頂上部より南側斜面に降つて設けられている点等から考えて、恐らくこれはその上に若干の盛土を有した円墳であつたが、丘地が北側に膨れているので道路が出来たゝめに瓢箪形を呈したものと見ることが妥当のようである。そ

して丘地の頂上に石棺を置かずしてその斜面を利用していることは、平石積式石棺と関係のあることで、こうすることが石棺を強固にするに役立つからであろうと思われる。（石川恒太郎）

第四章　王子谷住居址

最初王子谷が着目されたのは、福島町は彼の有名な前田元侯爵家所蔵の穀璧を出した所で、その璧を出した王之山が今の王子谷であるという地元の人々の考証に信頼した結果であつた。然し最初に予備調査を行つた際（昭和二十七年七月十七日）この畑地に弥生式土器や埴器の破片が夥だしく散乱してをり又打製石鏃一個を発見した等のことから、こゝに住居址が存在するものと考えたのであつた。尚お前田元侯爵家所蔵の璧の箱書には、

「文政元年戊寅二月日向国那珂郡今町農佐吉所有地字王之山掘出石棺中所獲古玉鉄器三十余品之一、蓋日向

上古之遺蹟多矣所謂王之山亦必非尋常古縁也

明治十年丁丑十二月　　湖山長愿題」

とあり、考古学雑誌第十一巻第十号には、右の記事に続いて、

「径一尺二寸、厚約二分ある所謂穀璧である。是が果して伝の如く日向発掘とすると、学界の一大事実と言わねばならぬ。我が古墳の中からは、支那の玉で作つた璧の発見せられた例は寡聞まだ之を知らない。古墳発掘品の中その模造かと思われるものは一二あるが、之も璧の模造と見るべきかは定説となつていない。しかし朝鮮大同江面からは、嘗て璧が発見せられて、関野博士によつて本誌にも紹介せられたことがあるから、この伝を絶対に否定することも出

来ない。平子鐸嶺氏はかつて之を見られて、その所見を記るして前田家に贈つたと見え、今にその草稿を存している故人を偲ぶよすがに、その全文を写しておかう」

といつて平子鐸嶺氏が前田家に贈られた「周宏璧考略」という一文を掲げている。その文章は省略するが最後に、

「今見ル所ノ璧面悉粒子ノ如ク凸起セルモノアリコレ呉氏ノ所謂穀璧タルモノナリ即コレ周代子爵諸侯ノ天子享用ノ器タリ（シ）モノナラム真ニ希世ノ珍宝ト称スベシ

弘璧ノ大サニツイテ云ヒ穀璧ハ製作ニツイテ云即コレ宏璧ニシテ穀璧タルモノカ

明治戊申二月念二日夜稿」

とある。この璧が考古学上如何に重大なものであるかということが知られるであろう。王子谷の発掘箇所は、山丘が西から東方に伸びた舌状丘地で、南北約七十米、東西約四十米の台地をなし、台地の中央、山に接する所に竹叢をなす神社址があり、これが王之山古墳の跡と見られたのであつた。その東方及び南方は畑に拓かれていたが、この部分に土器の散布を認めたのであつた。

一月二十八日調査団は二班に分れ、この古墳の跡と見られる箇所の発掘を瀬之口委員が受持ち、住居址の発掘を私と吉野委員が受持つたのであつた。尚お日高正晴氏がこれに参加された。

先ず最も有望と思われる神社址南方の畑に神社址東南端から東方六米の地点を中心に幅二米、長さ八米のトレンチを南北に掘つた。そして土器の破片を追うて床面を求めたが、開墾の際に表土を削平されたゝめに床面が地表下二十五糎～十五糎となつていて耕作のため荒されていて確かめることができなかつた。それで更らにトレンチの南端から西方直角に幅二米、長四米延ばしたが、この部分は地盤が隆起してをり、南から北、西から東に傾斜していることが認められ

た。しかも地盤が掘り返されているので、この附近に住居の境界があるであろうと思い入念に調査したが遂にそれを認めることができなかつた。

ついでそれから一段高くなつている北方の畑に、東西八米、幅二米のトレンチを入れた。こゝも同様に床面を耕作のため破壊されていたので確実にすることができなかつた。しかし地表下十五糎の所で埴器の杯三個が存在した。その一個は完全で他の二個は破壊されていたが接ぎ合わせれば完全となるものであつた。そしてその埴器から東方一米の個所に金属滓一個が存在した。この金属滓は塊状をなし、表面やゝ滑らかで図の如く長さ一五、五糎、幅中央部一一糎、高七糎で、地表下二十五糎のところに存在した。

以上の如くこの発掘によつて得られたものは埴器と金属滓のみで、住居址が確かにあつたとは思われたが、床面を耕作のために破壊されていたので之れを確実にすることができなかつたのは遺憾であつた。

三、結　論

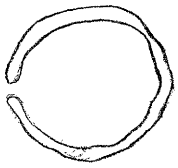
今回の調査は、最初に主たる目的とした前田元侯爵家所蔵の穀壁の出土地を確かめるということは失敗に終つた。けれどもこゝにわれ〳〵が考えなければならないことは、銭亀塚の発掘によつて明かにされた平石積式石棺が存在するということである。この種の石棺は日向の北部、中央部、その他になく、この地にのみ存在するという事実は、周代の壁が日向には出なくてこゝのみに出たという事実と共に注意せられねばならない。北九州に於いては平石積式石棺もあり又璧の破片も弥生式遺蹟から出ている。そうするとこれらの古墳の示す文化は、日向の中央その他の文化とは性質を異にし、北九州と直接関係を持つものと思われることは注目に値する。それらの特質がたとえ志布志、大崎に及ぶ古日向の遺蹟と繋がりがあるとしても、それは将来の研究に大きな示唆を与えるものと言わねばならないのである。

王ノ山遺跡

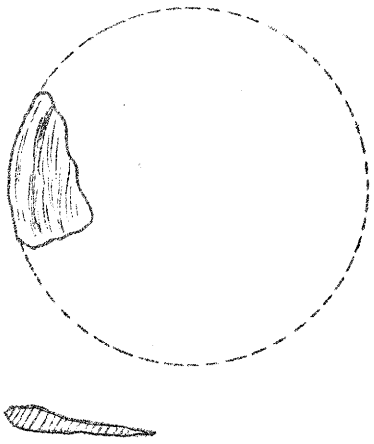
王ノ山遺跡

丸玉

銀環



鏡破片



なおこれら遺蹟に金属滓や鞴の羽口破片を出したということは、何時の時代かに金工址が附近にあつたことを示すものである。（石川恒太郎）

第五章　王ノ山古墳

我日向国カラ大陸渡来ト見ル前漢末又ハ後漢初期ノ璧ガ出土シテヰル、之ハ上代文化ノ上カラ非常ニ重要ナル事柄デアルカラ順ヲ追フテ之ヲ述ベテ見タイ。

昭和三年三月十五日平凡社発行ノ世界美術全集第二巻ニ、前田侯爵家所蔵穀璧蒲璧ノ写真ヲ載セ、田辺孝次氏ノ解説ガシテアル、今其ノ要ヲ拝借シテ録シテ見ル、

玉器ハ周ニ至ツテ大ニ発達シタ、朝廷ニ玉府ガアツテ、服玉、佩玉、含玉等ノ玉器ヲ製造シ、六瑞六器ノ玉器モ完備シタノデアル、六瑞ノ玉器ハ、爵位ノ表象ニ待ツモノデ、一鎮圭ハ四方ヲ安ンスル笏形ノ玉デ、二桓圭ハ公ノ執ル所ノ笏形ノ玉、三信圭モ同シク笏形デ侯ノ執ル所、四躬圭ハ伯ノ執ル所、五穀璧ハ米粒ヲ表ハシ子ノ執ル所、六蒲璧ハ籠目ニ編ンダ蒲席ノ文様ヲ彫琢シタノデアツテ男ノ執ル所トナツテイル、茲ニ掲ゲタノハ此約束ニ合致スル穀璧デ子爵ノ身分ヲ表象スル為ニ持ツモノデアロウ、玉質ハ非常ニ細カク且ツ光沢ヲ帯ビ径約尺五寸厚サ約四分アル、我国唯一ノ穀璧ト言ツテモヨカロウト思フガ、穀璧ハ普通径五寸トアルニ本品ハ尺五寸トアリ、大サカラ言ヘバ平子鐸嶺氏ノ説ノ如ク躬圭（？）ト称シテモヨカロウ。

蒲璧ハ六璧ノ玉ノ一ツデ男爵ノ持ツ玉器デアル、茲ニ掲ゲタノハ穀璧ト思ハルヽモノデアルガ、米粒ノヨウナ少サ

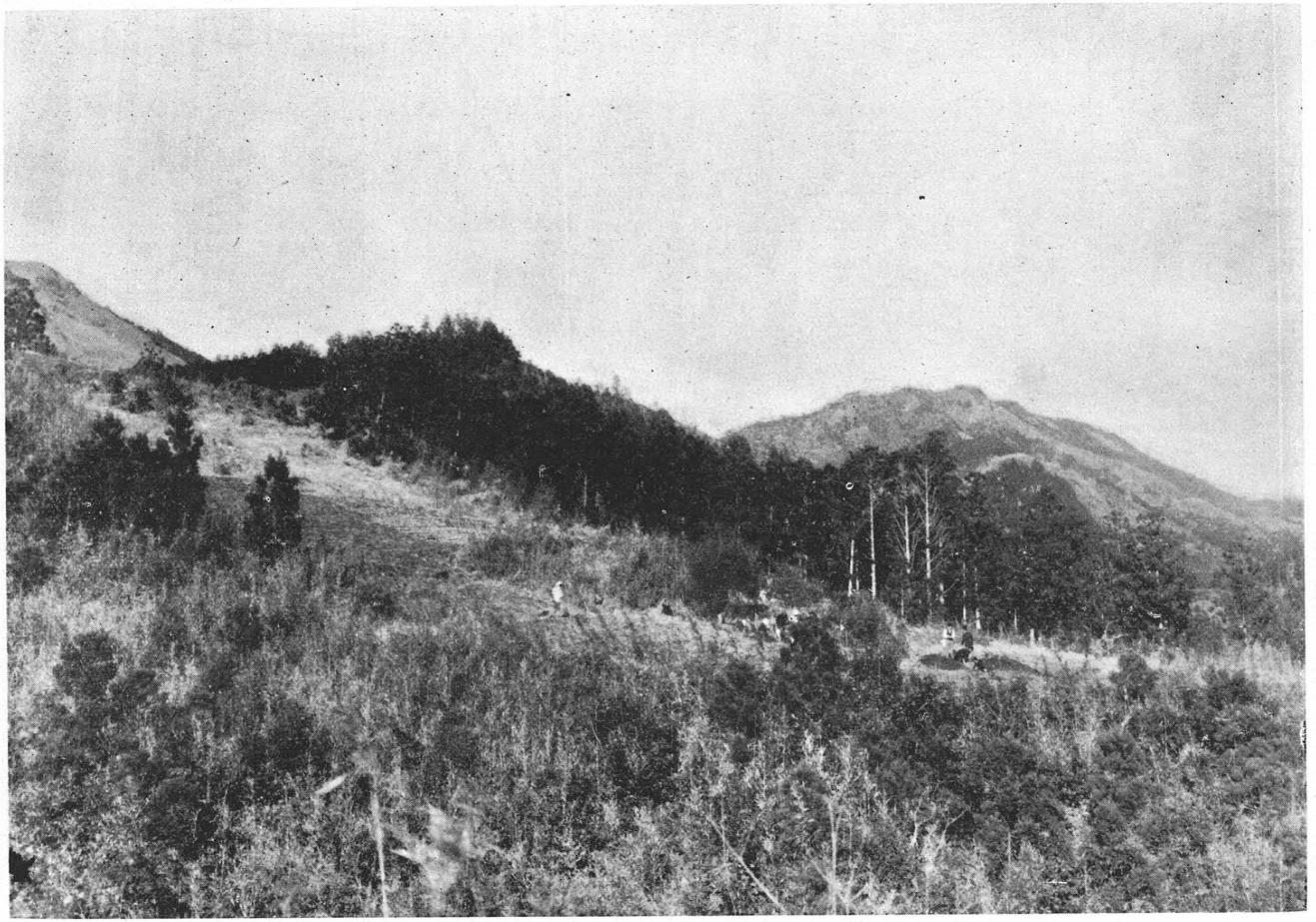
イ彫琢デナク寧ロ、籠目ノヨウナ文様ヲアラハシテアル為ニ蒲壁ト思ハル、モノデアルガ、何レニシテモ他ト比較スルモノガナイカラ何レトモ決定シ難イ云々。

本邦ノ上代遺蹟カラ玉類ヲ出シタノハ、筑前国須玖岡本カラ、明治三十二年頃甕棺ニ伴ツテ発見サレタ破璃璧残欠（東大蔵大正十二年大震災ノ際焼亡）及ビ文政五年二月筑前国怡土郡三雲村ニテ、甕棺鏡ナドト出土セシモノ、青柳種信怡土郡三雲村所掘出古器図考）大正末年昭和ノ初、中山平次郎博士、岡本須玖地方ニテ発掘シタ小璧片等ガアリ尚オ購入品トシテ、大正十年頃、東京帝室博物館購入品硝子璧二個分断片ガアル。

以上出土品、購入品トモ断片ノミデアルガ、前田家ノモノハ完全品デアル、余ハ前田家ニ照会シテ箱書ニ記シテアルノヲ録シテ貰ツタ。

文政元年戊寅二月、日向国那珂郡今町村農佐吉所有ノ字王ノ山カラ掘出シタ石棺中、古玉、古鉄器三十余点ノ内ノ一ツデアル。

然ラハ如何ニシテ日向ノモノガ遠イ金沢ノ前田家ニ伝ハツタカトイフト、彼ノ幕末ノ北地探検家トシテ有名ナ松浦武四郎氏ハ、古器類アサリヲヤリ日向ニ来タコトモ前後四回ニ及ビ、本荘町稲荷社祠官宮永真琴氏トハ交遊最モ深ク、来遊ノ都度宿泊シ、詩酒徴逐シテ盛ニ気焔ヲ挙ゲタモノラシイノデ、前記今町ニモ自身旅行脚ヲシテ之ヲ譲受ケタモノラシイ、松浦氏ガ日向ニ来タノハ幕末頃デ佐吉翁ハ文政三年八月ニ死シテ居リ、次代佐吉ハ昭和二年物故シ、三代助次郎ハ昭和十四年ニ死去シ、現代ノ当主ハ河野善太郎氏デ、佐吉翁カラ四代目ニ当ツテ居ル、松浦氏ガ璧ヲ得テ去ツタノハ、三代目助次郎ノ時デアロウ、松浦氏ガ此ノ遺品ヲ前田家ニ譲ツタノハ、明治十年頃デアルラシイガ、日向ノ古墳出土品ナドモ其ノ都度必ズヤ其二三点乃至四五点ハ携出シタト思フガ、コレ以上ハ手ガカリガナイ、氏ノ日記ハアツタ筈デ、



王ノ山遺跡全景

文部省ノ土田三平氏ニ頼ンデ捜索ハシタガ、松浦氏ノ伝記ヲ親族ノ某氏カラ横山健堂氏ニ書テ貰フコトニナリ、日記類参考書類マデ添ヘテヨコシタソウダガ、其ノ内横山氏ハ死去シ親族某氏モ死去シタノデ、何等記述ノ残サレタモノガナイトイフ、然ルニ中村徳五郎氏ガ鹿児島在留中ハ、雑誌三州ニ引用シタ記述ハ、残片乍ラ多少存シ、近時松下鉄太郎君カラ見セテ貰ツタガ、今町ニ関スル部分ハナイ。

世界美術全集ニ掲ゲラレタ、写真ト其ノ解説ヲ見タ余ハ、福島町ハ手近イ所デアリ、王ノ山ノ古墳（カ又ハ単ニ上代遺蹟カ）ナルモノヲ発見シヨウト、今町ノ地ヲ取調ベタコトハ一再デナイ、遂ニハ同町長デ前代議士デアツタ吉松忠敬氏ヲ煩ハシ、先ヅ佐吉ノ墓ヲ取調ベ、次々進ンデ調査ヲマトメテ見ヨウトシテ見タガ、吉松氏ノ熱誠モ之ヲ尋ネ出スコトハ出来ナカツタ、ソレデ遂ニハ今町ノ墓トイフ墓ヲ片ツ端カラ調ベテ見タガ、全然不明デアツタ、然ルニ昭和二十六年ノ冬トナルト、余ノ鹿児島県志布志中学校デ、師弟ノ関係ノアツタ松下鉄太郎君ハ、此ノ事ヲ話シタ後偶々古新聞ヲ整理シタ中カラ、今町ノ古墳ノ記事ヲ見ツケ、余ニ知ラシテクレタ、古新聞トイフハ明治二十年ノ頃、深江村長時代、一新聞記者ガ採録シタモノデ、今町ニ王ノ池ガアリ、王ノ山ノ古墳ガ書カレ、墳ハ隆然タル古塚デハナイガ、二間ニ一間位ノ竹藪ヲナシテ居リ、石棺モアリ、附近ノ畑中ニ赤イ土器ガ散ラバツテイルトアツタ、之ニ勇気ヲ得タ余ハ早速福島町役場ニ牒シ、古老ノ松田禎雄氏マデ煩ハシテ、其ノ祕出ヲ求メタ、所デ現時ノ今町トイフノハ、福島川ノ右岸ト海岸一帯ニ止ルヨウデアルガ、旧幕時代ニハ今町ニ注ゲ小川ノ支流ヲ遡ツテ、今ノ中学校附近カラ其ノ北方穂佐原アタリ迄ヲ称シタラシイ、今日イフ福島町全体トシテハ、串間（櫛間）デアツタラシイ、斯クテ王ノ山ハ字王ノ池ノ南方ナル、山腹ノ竹藪ガ最モ有望視サレ、百中九十八マデハ間違ナシトサレタ。

コヽデ後漢書ノ東夷伝及ビ魏志ニ書カレテアル日支交通ノ大要ヲ書テ見ル。

後漢書、東夷列伝第　七十五　　宋苑曄撰

倭在二韓東南海中一、依二山島一為レ居、凡百余国、自二武帝滅二朝鮮一使訳通二於漢一者三十余国、（後略）

此諸国中卑弥呼国ハ、古来広ク論議サレ、其ノ故地ニ大和説アリ、又一方ニ九州説アリ、帰着スル所ヲ知ラナイ、大和説ハ日本書紀ノ本文ニ之ヲ認メ、明治ニ入ツテ、三上参次、三宅米吉、高橋健自、山田孝雄、内藤虎次郎諸博士之ヲ唱ヘ、中ニモ高橋博士ハ、考古学上ヨリ論定シ、大和説ノ動カスベカラザルヲ述ベタ。

之ニ対シ九州説ニハ、江戸時代本居宣長駆戎概言ニ之ヲ述ベ、文博喜田貞吉、同白馬庫吉、古谷清、橋本増吉氏アリ、高橋博士ノ考古学上ヨリ論議サレタノハ、従来ヨリ数歩ヲ進メタモノデ、大和説ノ動カスベカラザル所ヲ述ベラレテ居ルガ、読過ノ後マダ何カ物足ラヌモノガアルノハ、第三者ノ等シク感ズル所デアロウ、喜田博士ハ狗奴Kunaハ Kumaタルベク、ソシテソレヲ魏志ニ見ユル通リ、九州ノ南部トシ、狗奴国ト見テ熊襲ニ当テラレテ居ルガ、之モ慥ニ聞クベキ一説ダト思フ、山田博士ノ狗奴ヲ上毛ニ比定サレテ居ルノハ、更ニ一考ヲ要スベキデハアルマイカ、

以上魏志殆ンド全部ヲ引用シタノハ、県下ノ考古学徒ヲ文献ニモ親マセン為デアツテ、遺物ノ研究ニモ導入センガ為ノ微意ニ外ナラナイ。

余ハ尚オ魏志ト同ジク陳寿ノ撰デアル、呉志ヲ引イテ見タイ、

呉　志　　巻二　陳寿撰

孫権黄龍二年春正月、遣二将軍衛温諸葛直一将二甲士万人一浮レ海求二夷洲及亶洲一、亶洲在二海中一、（中略）世相承レ有二数万家　其土人民時有レ至二会稽貨市一会稽東県人、海行亦有レ遭二風流移至二亶洲一者上、所在絶遠、卒不レ可レ得レ至、但得二夷洲数千人一還。

ナドアルガ魏志ニ依リ考フル迄モナク此頃倭ニ至ルニハ沿岸航路デ海洋横断ナドハ出来ナカツタ、然ルニ右ニ引ク所又彼三国志ニ見ユル赤壁ノ戦ニ、呉軍ハ風雨ニ乗ジ、魏ノ軍船ヲ焼テ之ヲツクシタノヲ見ルト、呉ノ方ハ水軍ガ相当ニ発達シ、恐ラク今ノ琉球カラ奄美大島掖玖多襖ヲ経テ、九州南部ニ渡航シタト見テモ差支ナイ、茲ニ於テ余ハ前田家ノ璧トイフノガ、北九州カラ流入シタトカ卑弥呼トノ戦利品デアルトカイフコトヲ考エテ見ル外ニ三国対立ノ際、南九州カラ呉ニ入朝シテ封冊ヲ受ケタモノガアルコトヲ予想シテ考察ヲ進メタ方ガヨイト思フ、タヾ今日迄前田家ノ璧トイフヲ拝見モセズ、彼是論ジテモ仕方ナイ、併シ朝野ノ学者トテモ璧ヲ実見サレタノハ少イ様デ、之ヲ取上ゲラレタノハ、大村西崖氏ノ東洋美術史ニ見ヘタ位ノモノ、又璧ノコトヲ書イタモノデハ、有竹斎古玉図譜ガアル位ダカラ、天下ノ有識者、考古学徒タルモノ、モツト視野ヲ大キクシ、コンナ問題ノ実相ヲツカムヨウニシタイモノダト思フ。

コヽデ所謂王ノ山古墳附近ノ地形ヲ少シ書テ見ル。

今ノ日向大隅ノ境ニ、笠祇嶽ガアル、（標高四四四）山ノ西部ハ志布志町デ、明治二十九年マデハ日向国南諸県郡トシテ鹿児島県ニ隷シテイタ、農林省ノ地質図ニ依ルト、一帯ノ地ハ第三紀層トナツテイルガ、第一世界大戦ノ際独リ留学カラ帰ツモ来ラレタ、東京高師教授ノ地学者某氏ハ、其ノ山形カラ見テ中世層トスベキデハナイカ、都井岬一帯ノ山脈ヲ志布志カラ眺メタ地形ハ此山モ含メテドウシテモ第三紀層トハ受取レヌト、帰朝後見学旅行ノ際其話ヲ承ツテ居ル其笠祇嶽ノ支脈ガ東南ニ一支脈ヲ出シ、支脈ノ東南方ハ福島町ノ海岸低地デ、小サイ丘陵ガ其ノ間ニ出入シテイル、字今町ハ福島川ノ注ゲ下流ノ海岸砂丘ニ位置シ、所謂水郷ノ地デ田園集家ノ沖積地デアル、王ノ山ノ地ハ笠祇嶽支脈丘陵ノ中腹ニアル事前申述ベタ通デアル、

一月二十六日銭亀塚発掘ヲ終ツタ我々ハ二十七日愈々発掘ヲナス事ニナリ、宿所ノ福島仲町カラ東北ニ車ヲ走ラスコト

一里、王子原ノ畑地ニ出タ、原頭カラ見タ支脈ヲ色ドル山々ハ四条風ノ画デ見ルヨウデ南方的冬期ノ山水美デアル。ソレカラ台地カラ小谷ヲ廻リテ目的地ニ着ク、地ハ西側ニ二百米位モ高キ丘陵ヲ負ヒ、東斜面ノ中部畑地ノワキニ小竹藪ガアル、斜面ハコヽデ稍緩斜シ、二米モ低キ畑ニツヾキテ、東北ニ開イテヰル、明治二十年頃ノ新聞ニ書イタ古墳トイフノハ、コノ竹藪ノ所ヲ指スノデアルガ、タヾ通リ一辺ノ記述ト見ルベキデ、古墳ノ本質ニ触レナイ、又ソレ以外ニハ此処ニ関シタ記録ハ無イノデアルガ、新聞ニ書カレタ封土モ、今ハ別ニアルノデナク、石棺ト見タ櫛ラシイモノガ南方カラ覗イタ藪中ニ一寸見ユル許デアル、発堀ニ先ダチ地元及ビ人夫ノ要望ガアリ、墳前祭ハ銭亀塚デ一所ニスマシテアツタガ、藪中ニ何カ祭ツテアルトイフノデ、特ニ神職ヲ招イテ祭典ヲ行フ、ヤガテ竹藪ハ刈ラレ、鍬ハ入レラレタ、図ニ示スヨウニA地点カラ堀進ンデEFGHノ長方形ニナツタ土砂ヲ取リ去リ、深サ五センチ位デ岩石ガ東西ニ横ハツテヰル、愈々古墳トスレバ石櫛デアル、併シコヽニ小祠ガアツテ其ノ敷石ニ使用サレタモノラシイカラ、案外近代ノモノラシイ、腐植土、植土ハ次第ニ取去ラレタ、土師ノ破片ガ数点アラハレル、深サハ次第ニ増シ、一メートルトナツタ土師片モ七、八十点トナツタ、最早晩方トナツタノデ、是迄デ作業ヲ切上ゲ宿ニ帰ル。今日ハ人夫四名ヲ使用シ、学生数名奉仕シタ、

一月二十八日早朝カラ発掘ヲナス、発掘面ハ次第ニFHノ方ヘト堀広ゲ、深サモ上部ノ黒土層カラ赤土ヘト進ンダガ、凡テガ一メートルトナツタ所デヤメタ、出土シタモノハ次ノ通デアル、

(一) 鞴ノ火口附近デアル、鉄分ヲ含ンダ堅キ塊。

(二) 火口先ノ一片デ火口ノ内壁ノ一部ヲ示スモノ粘土質ノ焼イタ、厚サ三センチ円ノ一部ヲナシテ横ヘ三センチホド曲リ、前ト同ジク其先鉄滓ニ鉄分ヲ含ム。

(三) 人工ニ成ルヤヽ堅キ粘土焼ノモノデ、内ニ片ハ側辺スペ〳〵ト扁平ヲ呈シ、アトノ一個ハ棒状ノモノデアル。

(四) 土師器破片、完全ナモノナク、凡テ半壊又ハ小破片デアル、糸底ノ見ユルモノモ多イ。破片計百六十余点。

(五) 弥生式土器、中期頃ノモノト見ルベキ破片四。

(六) 破片一

(七) 貝類二 一ハ瑚珊礁破片、一ハテングニシ

(八) 陶器片 農耕ノ際捨テタモノト見ル江戸時代

本日モ人夫四人ヲ役シ学生奉仕者数名アリ晩方引上グ

出土品モアツタカラ各員ノ所見ヲ徴スルニ左ノ如シ、古墳ナリトスルモノ、

文政ノ発掘カラ百年以上経過シテ居ル訳ダガ、後ヲ復旧シタトシテ凡テハ酸化霉爛し去ツタモノガ多イ筈ダノニ、鞴ノ品ガ出タノハ慥ニ其ノ残品ダロウ、ソレニ附随シタ三個ノ焼成品モ同ジデアル。

文政度ノ発掘後恐ラク再度ノ発掘ガアツタト思フ、文政度ノ発掘ガ次々ニ伝ヘラレテ居タノデ、或時代発掘ヲヤリ、明治年代ニ古墳トシテ取上ゲテ書イタモノデアロウ、若シ再度ノ発掘ガナカツタナラ、此場所ヲ古墳トシテ書ク筈ガナイ、仲町ノ古墳中、霧島塚北方ノ毀損セル墳ヲ書テナイノヲ考慮ニ入レルトヨイ。此処ノ竹藪ニ何カ祭ツテアルノハ、古墳ヲ掘ツタ後ニ、恐レ虔ンデヤツタモノ地方民ノ心理ヲ表ハシタモノ、コレモ古墳ノアツタ事ヲ証スル。

王ノ池ノ名ノ古イ事ハ、土地台帳ニモ知ラレル、ソノ附近ニ璧ヲ出シタ、処ダカラ王ノ山ノ名ヲ生ジタト見ルベキダ古墳ヲ非トスルモノ、

文政度ノ発掘ガ此処ダトスレバ、今少シ遺品ガナケレバナラヌ、鞴ノ遺品ハ東斜面ノ畑カラモ出タカラ、ソレガ証拠

ニハナラナイ、結局璧ガ出タ程ノ古墳デアレバ、今少シハ遺物ガナケレバナラズ、尚オ他ノ場所ヲモ捜シテ見ル事ニシヨウトイツテ、璧ノ出所ハ不明ノ侭、後日ニ譲ル事ニナツタ。（瀬之口傳九郎）

第二部　日の影新畑洞穴遺跡及大溜包含層

第一章　調査の経過

日向遺跡調査団の第三年度行事として昭和二十八年九月十日より、同十七日に至るまで、題記の遺跡調査を行つた。

団員は次の通りである。

団長	県教育長	野村憲一郎
副団長	県社会教育課長	金田智成
同	県立博物館長	日高重孝
県文化調査委員		石川恒太郎
同		瀬之口伝九郎
同		吉野忠行
	九大助教授	鏡山猛
	県社会教育課係長	佐藤勝信
	県社会教育主事	寺原俊文
	同課員	西橋敏雄
	同	宮里孝信
	県立博物館学芸員	黒木淳吉

十　日　晴。

午前八時半、日の影町興梠教育委員長及び高松主事の案内で、一同トラックに乗じ、日の影町大字七折新畑の洞窟に向う。遺跡は日の影町から北方約一キロ、見立鉱山への道路に沿う渓谷の中腹に在り。略西面し、間口一四、八〇米、奥行最深部で約三米、高サ最高部で約一、二〇米あり。阿蘇火山による安山岩の柱状節理を成せる一大凹窟である。直下に日の影川が流れている。

町内有志による加勢数人を役して、窟前の密林を払い、窟内を南よりA・B・C・Dの四区に分ち、測量と発掘調査とを開始する。

午前中、A区より床下約三〇糎にして縄文土器の破片数個、敲石一個出づ。午後、人骨らしき破片、石鏃三個、臼歯一個、石斧一個、石錘二個出づ。本洞窟上部にも小洞窟あり、探りて石錘八個を得たり。午後五時終業。

十一日、晴。

午前中、C区の床面より約三〇糎にして蛤貝殻一個、土器破片数個、歯及び人骨粉らしきもの一握、石鏃二個、午後に至り、同区より祝部土器破片二個、歯一個、猪歯一個、敲石一個出づ。本夕、鏡山猛氏来着。夜、日の影小学校に於て、町内有志、学生等と座談会を催す。

十二日、曇、後、雨。

午前八時出発、洞窟の南方大菅部落の大溜包含層の調査を行う。こゝは日の影川に枕む西面丘陵の断層（トロッコ道開通のため生じた）にて、トロッコ道約一米上部が地盤らしく、南北に六米を限り、A・B二区に分ちて発掘す。

午後、A区より石斧四個、縄文土器破片、石錘等多数出土す。土器は大略、御手洗式、鐘ヶ崎式のもの多し。降雨の

ため四時半終業、出土品を河畔に洗つて持ち帰る。（日高重孝）

第二章　新畑洞穴遺蹟及び大溜包含層

一、遺蹟所在及び發見の動機

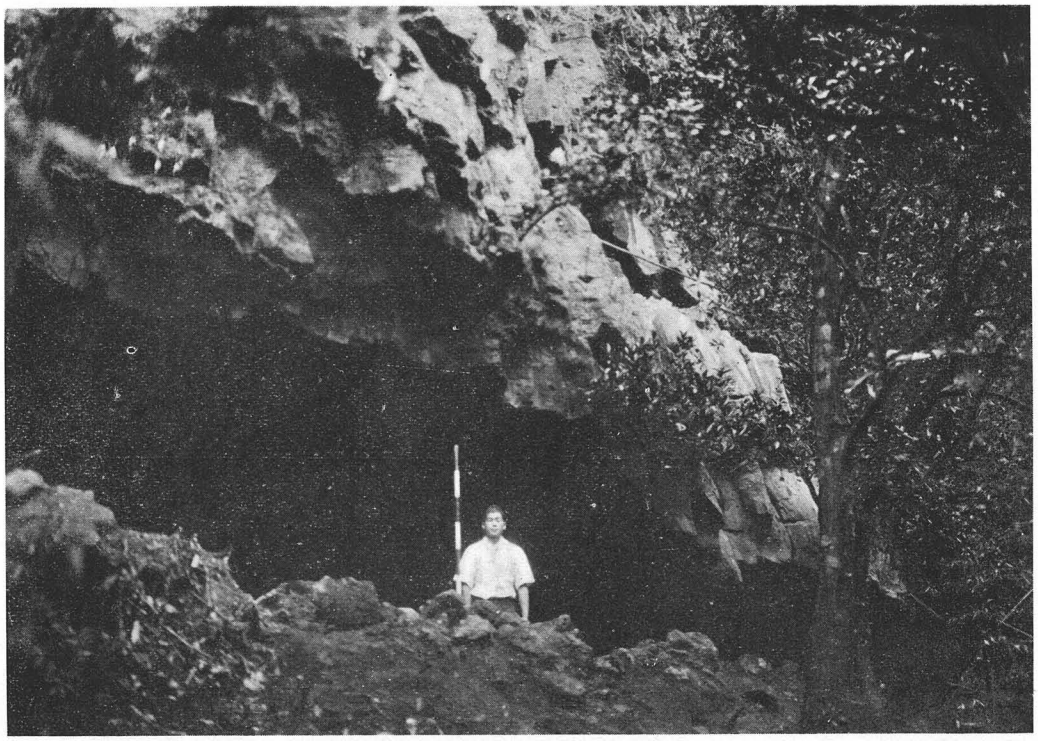
大溜（おだまり）遺蹟は西臼杵郡日の影町大字七折字大溜にある。この地点は日の影町の日の影橋から北に日の影川を遡つた約三キロ半の左岸大溜部落の丘地にある。この地は近く小学校の移転予定地となつているやゝ平らな丘地で、近年この丘地の下縁に川に沿うてトロ道が開通したが、同村大菅から延岡市の旭化成工業株式会社工場に通つている同社工員佐藤常生氏が通行中、同地点に土器の破片が包含されているのを認め、その数十点を得て筆者の鑑定を求められたのが昭和二十八年の初め頃であつた。一見して縄文土器の甚だ興味あるものであることを知り、現状の保存方を依頼したのであつた。

同年七月二十八日県教育庁の命を受けて日の影町及び鞍岡村の予備調査に出張し、仝日夕日の影町に到着、旅宿で佐藤常生氏と現場について談話中たまたまその途中の新畑に洞穴があり最近まで人が住んでいたということを聞いたのでかねて洞穴遺蹟のあるべきことを信じていた折とて翌二十九日佐藤氏の案内で同町興梠教育長と共に現地を見た。然るに洞穴は川を前（西）にして開き長さ十四米五〇深さ四米、高さは入口で二米二七あり、この穴の上約二米の絶壁上に第二段の穴があり、これは長さ三米、深さ二米七〇、高さ一米あつた。従つて外方から見ると二階造りの洞穴のように見える。尤もその又三米位い上方に穴が望見されるが、絶壁で近づくことができなかつた。この一番下の広い洞穴に入

つてみると、地盤から中央部で五〇センチ位い堆土があると見られたが、注意すると、その堆土中には多くの繩文土器破片を包含して居り、更に打製石鏃を一個発見し、更に第二段の穴には洞穴前にあつた柚木から一本の丸木を岩壁に渡して佐藤氏の弟君が這入つたが、その床面から土錘七個を採集した。こうしてこの洞穴は古代人の住居址であることが確認されたのである。そこで筆者は発見者に許された権能によつて佐藤、興梠両氏と協議の上この洞穴住居遺蹟を新畑洞穴遺蹟と命名した。

二、新畑洞穴遺蹟の調査

県教育庁で組織した日向遺蹟調査団では昭和二十八年九月十日から二日間この遺蹟の調査を行つた。第一日の九月十日は社会教育課宮里氏らによつて現地の測量を行い、人夫二名を雇い、高千穂高等学校柳宏吉氏、興梠町教育長、佐藤常生氏、宮大田中熊雄氏、宮大学生茂山、諏訪両君らの参加を得て調査した。洞穴の状況は東から西に向つて傾斜する岩盤の洞穴で、床面の岩盤は相当の角度をなしているが、その上に自然の堆土と人工の盛土があつて殆んで平面をなしていた。南北に長くなつているので、これを南からＡＢＣＤの四区に分け、ＡＢＣ各区は四米、Ｄ区は二、八米とした従つて穴の全長（南北）は十四米八〇あるわけである。Ａ区は殆んど岩盤が床をなしていて、岩間から湧き出る水が流れ緑苔を生じていて発掘するところはなかつた。Ｂ区は堆土が西に向つて厚く積つてをり、東壁は岩盤が天井から続いている。天井は全体的に平たく高さ中央部で一米五〇位いで人間は立つて洞中を歩くことができる。岩間を漏れて湧滲する清水は、床面の下部をくぐつているので、床面を掘り下げると、岩盤に接する部分は礫石が多く、又その間に土器石器を多く含んでいる。この区の発掘で石器、土器破片、動物の骨、歯等を多く採取した。石器は石鏃、石匙、石錘、石鍬、（丸石）及び石鏃その他の原料及び半製品で、磨製石斧（中央より二つに折れている）一個を得た。土器は繩文



新畑洞穴遺跡

大溜包含層発堀状況

大溜包含層

土器の破片であつた。動物の骨は比較的少く、歯も数個を採集した。

西側すなわち軒下の床面に、地表下二一糎乃至三三糎を上表として大きな石の列があるのを認めて石を残して掘つて行くと、これらの石が多少動いているが、斜面をなしている岩盤に対して水平を保つために土止めのために石列を置いたものと認められた。この石の面上からは、土器及び石器、木炭などを掘出した。

翌十一日は午前八時に宿舎を出てC区の発掘を行つた。この区の中央部に爐跡らしいものがあつた。それは数個のやゝ大きな石を積み、その中に穴があり、穴は南北に長く、穴の中に石器屑と共に鏃一本があり、木炭片も見出された。そしてこの部位の天井が最も燻つているのも見逃されない。

ついでD区を発掘して一応この遺跡の調査を終つたわけであるが、C区D区で発掘した石器は石鏃、石匙、石斧及びそれらの半製品、材料等で、土器は縄文土器、弥生式土器、須恵器などであつたが、縄文土器が最も多く弥生式と須恵器は数点を交える程度であつた。縄文土器には有孔のものもあり、これらの外に貝殻一枚、臼歯、動物の骨片等も採集した。

三、新畑洞穴遺蹟の發掘品

新畑洞穴遺蹟の発掘遺物はこれを石器、土器、動物性遺物（自然遺物）に分けることができるが、その数量は夥たゞしいもので、凡そ蜜柑箱二箱であつた。

石器は殆んどみな打製石器であるが、たゞ一個の磨製石斧があつた。それは小形のものであるが、中央から二つに折れ、その二つは洞穴中のかなり距つた地点から見出され、且つ火に会して赤色に焼けていることは注目すべきもので、この洞穴が幾回か住居に利用されたことは、縄文土器の外に弥生式土器や須恵器があることで容易に知ることができる

が、その後にこの床面が攪乱されたことを示すものである。

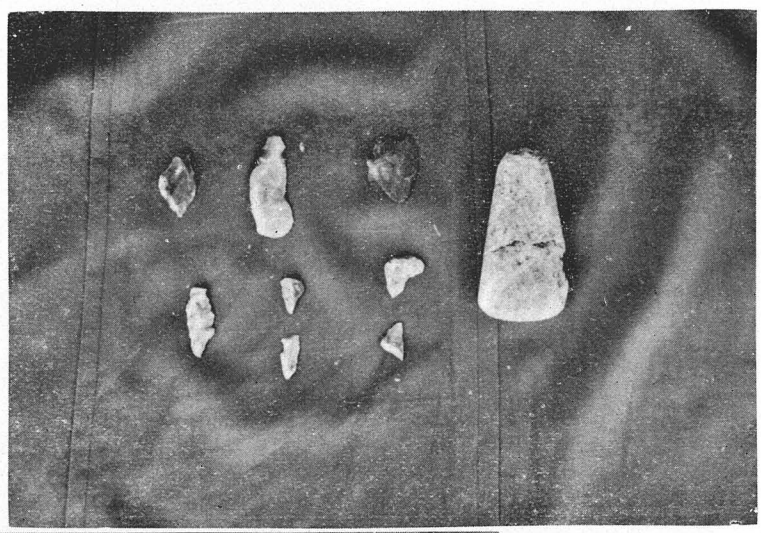
打製石器は、この遺蹟の遺物中で最も重要なものである。もちろん石鏃、石錐などのありふれたものもあるが、石斧とも見られ或いは半製品とも考えられる一類の鋭利な打石器は、石鎗、石劔、石鏃、石匙の極めて古い形態であり、県下各地で見出される石器中で最も古い形のものと見て差支えあるまいと思う。これはこの洞穴が最初に、そして最も永く住居に利用された時の年代を示すものである。その一部のものは旧石器の面影をなお幾分止めていることが感ぜられる。従ってこの洞穴の石器は将来他の類例と併せて充分に研究しなければならないものである。

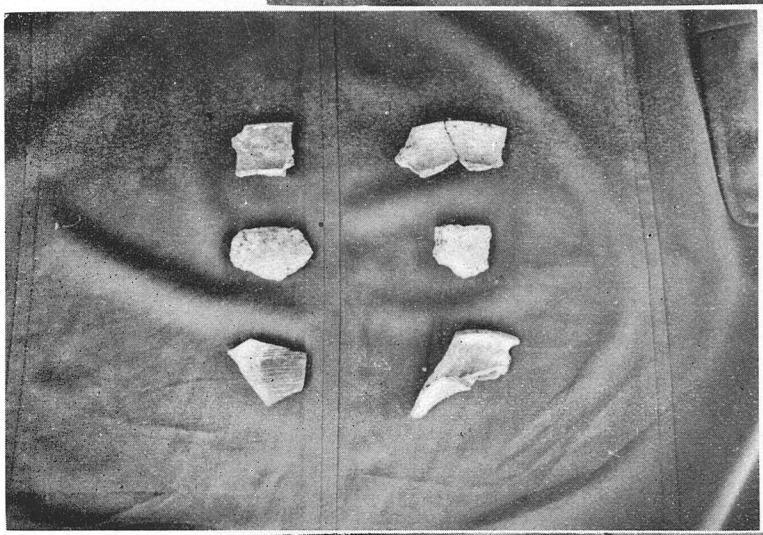
土器は殆んど縄文土器で、それに数点の弥生式土器と須恵器が混っている。弥生式土器の数点は高杯か甕の口縁部の破片であり、須恵器の数点も壷か甕の破片と思われる。

以上の数点を除けば全部縄文土器で、これらの土器の量の差は、嘗てこの洞穴が住居に利用された時期の長さの時間的差を示すものと考えられる。すなわち縄文土器使用の時代に最も長く住居に利用され、その後弥生式時代や須恵器時代にも一時利用されたことがあつたものと見ることができる。

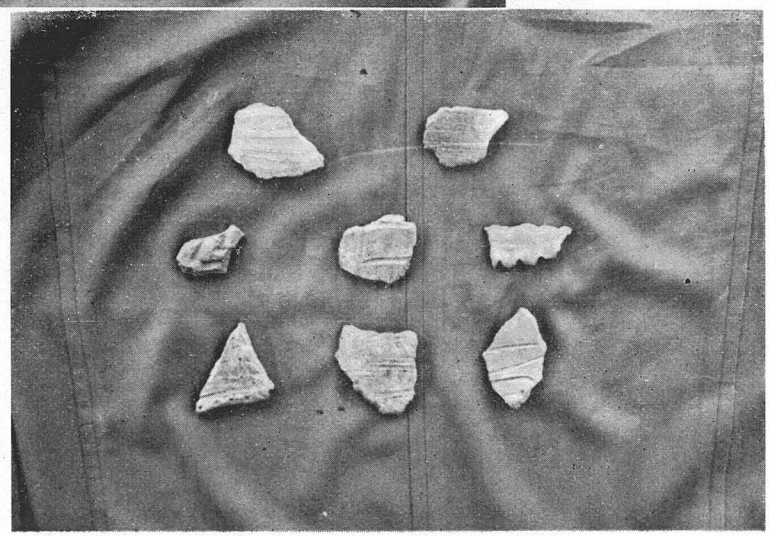
さてその縄文土器は、これを後に記す大溜の土器と比べると相当に趣きを異にしている。その焼きが非常に硬いのと表面が幾分白味を帯びていることが認められる。これは岩間を滲透して来る水に浸されていたためかとも考えられる。七折は鐘乳洞があつて石灰岩層が上流にあるから硬く白味を帯びているのはそのためかとも一応考えられる。こうした表面上の変化は自然的にして後世のものであるとしても、土器の紋様、焼成が大溜遺蹟のものと非常に異る。新畑洞穴のものは連点文、突刺文を主とするもので、それに縦横の平行直線文を組合せ、或いは平行斜線を平行直線を組合せる押型文などに特徴を見ることができる。

新畑洞穴遺物石器

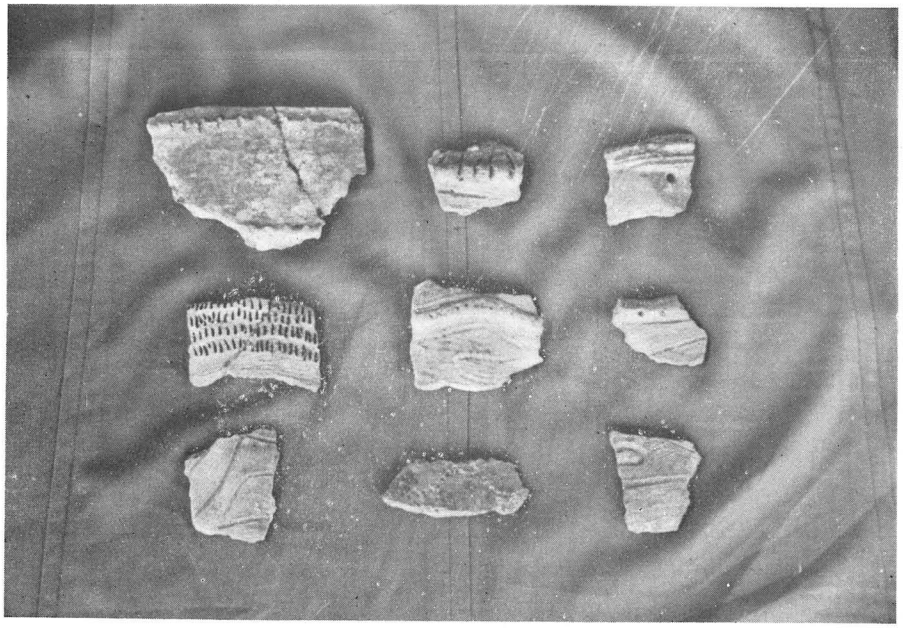




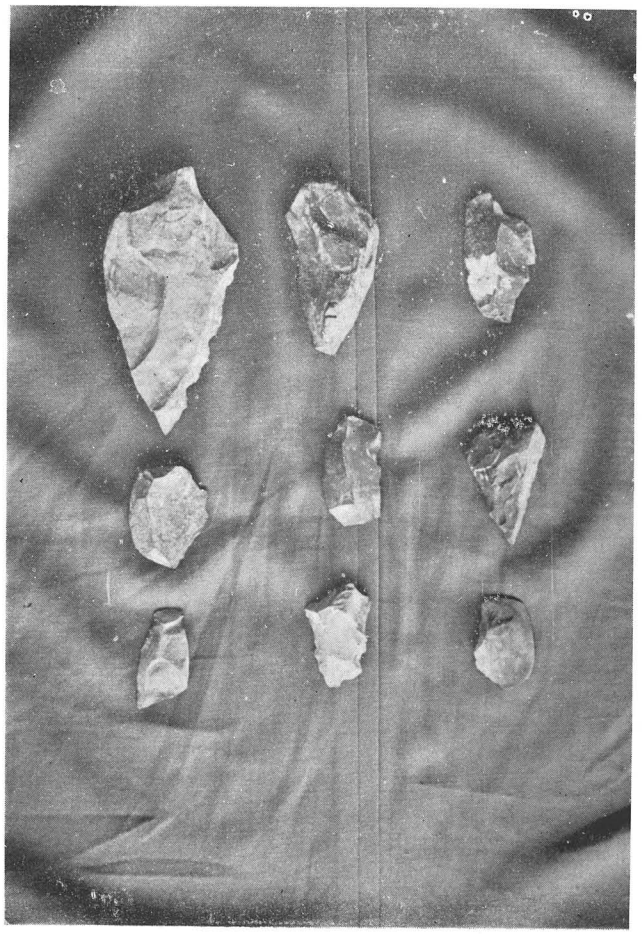
弥生式土器上部四個　須恵器下部二個



仝　上



新畑洞穴遺物繩文土器片



新畑洞穴遺物石器

自然遺物は前に記した如く動物性のもので一枚の貝殻と動物の骨と歯であつたが、貝殻はたゞ一枚であつたから後世の混入と見られないこともない。動物の骨は比較的小さいもので、鳥骨と獣骨であつた。歯も獣類のものであつた。この洞穴に相当永く人類が住んだことは明らかであるが、その割に獣骨が少いのは、恐らく獣骨等の捨場は他にあるものであろうと想像される。その場所としては洞穴の前方（西側）の斜面が考えられるが、こゝを調査する時間がなかつた

四、洞穴遺蹟の年代其の他

新畑洞穴は以上に記したところによつて古代人の住居遺蹟であることは確かであるが、この洞穴は高さ数十丈の岩山の中腹にポツカリ開いた岩穴である。どうしてこういう洞穴が自然に出来たのかと思つて二階の穴をよく見ると、この熔岩と思われる岩石中に鉄分を含んだ部分があり、永い年月の間に鉄分が酸化腐蝕して軟弱となつて崩れ去つて穴が出来るらしく、二階の穴の南端部は鉄分を含んだ軟弱な部分が残つている。穴は西方の日の影川に臨み後ろと左右は岩山であり、今は河面から相当高いが、往古樹木がうつそうと茂つていた頃は河水も多かつたであろうから、前方に降つたところに川があり極めて好適な住居であつたに相違ない。俗にこの洞穴をメンボガイワヤと呼び、この川上にオンボガイワヤというのがあるというから、こうした住居遺蹟は尚お他にもあるものと思われる。

問題は二階の洞穴であるが、下の穴の天井から絶壁といつても二米の高さであるから、丸木や梯子を用いて容易に上ることができ、一人なら充分寝むこともできる。こゝで土錘が多く見出されたから、これが何かに利用されたことは明らかである。前に川があり、石錘も下の穴から見出されたから土錘があつても不思議ではない。但しこの土錘は比較的新らしく土師器と見る方が良いであろう。二階は人の住んだ場所というより網などを置いた場所と見る方が妥当ではあるまいか。

宮崎県立図書館

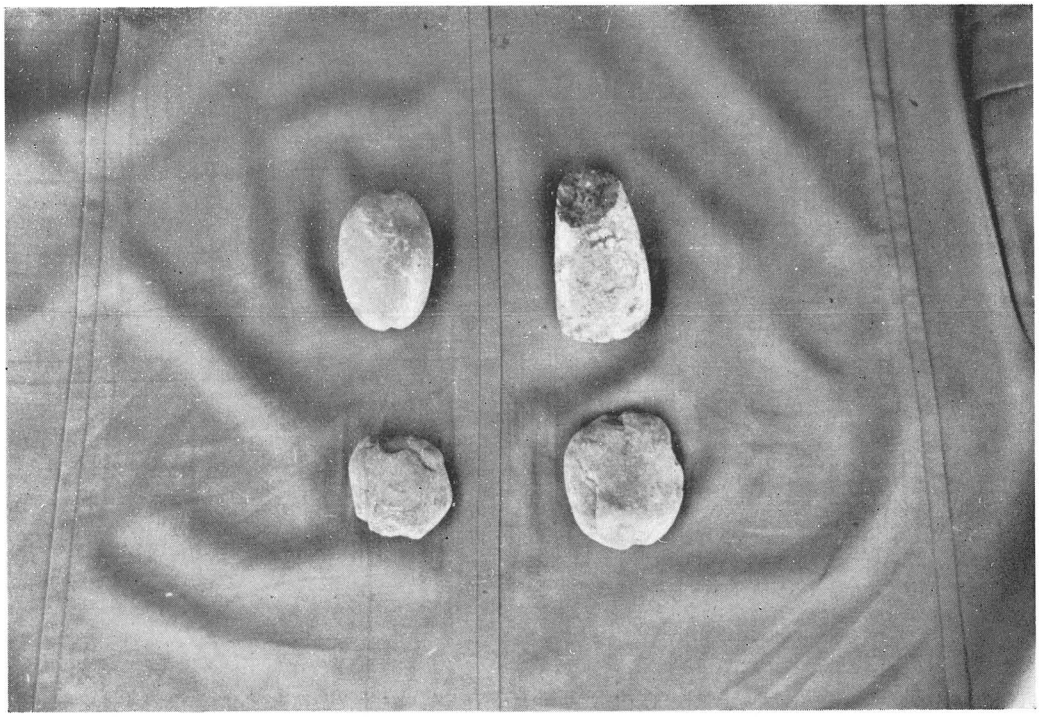
次ぎにこの洞穴の使用された年代は、前にも記したように、繩文土器時代であつて、その後も弥生式時代や古墳時代に利用されたことは弥生式土器や須恵器を混じていることで知られるが、その量の少いことから見て余り久しくは利用されなかつたと思われ、殊に須恵器は表面又は上の層で見出された。然しかく後世に屢々利用され殊に数年前も人が住んでいたというから、その度に床面を掘り平均させたから、中の遺物が掘り返されていたことは、磨石斧が二ツに折れて相当に隔つた位置（一はB区他はC区）から見出されたことや土器破片が小さく破れていることで証明される。然し最初にそして最も長く利用されたのは繩文土器時代で、それも石器が非常に古い形式を止めている点から考えて、この洞穴遺蹟は少くとも今から四千年以上に遡り得るものと見て良いであろう。

尚お発掘の遺物は全部県立博物館に保管している。たゞし予備調査の際に発見したものは日の影町教育委員会に保管を依頼した。

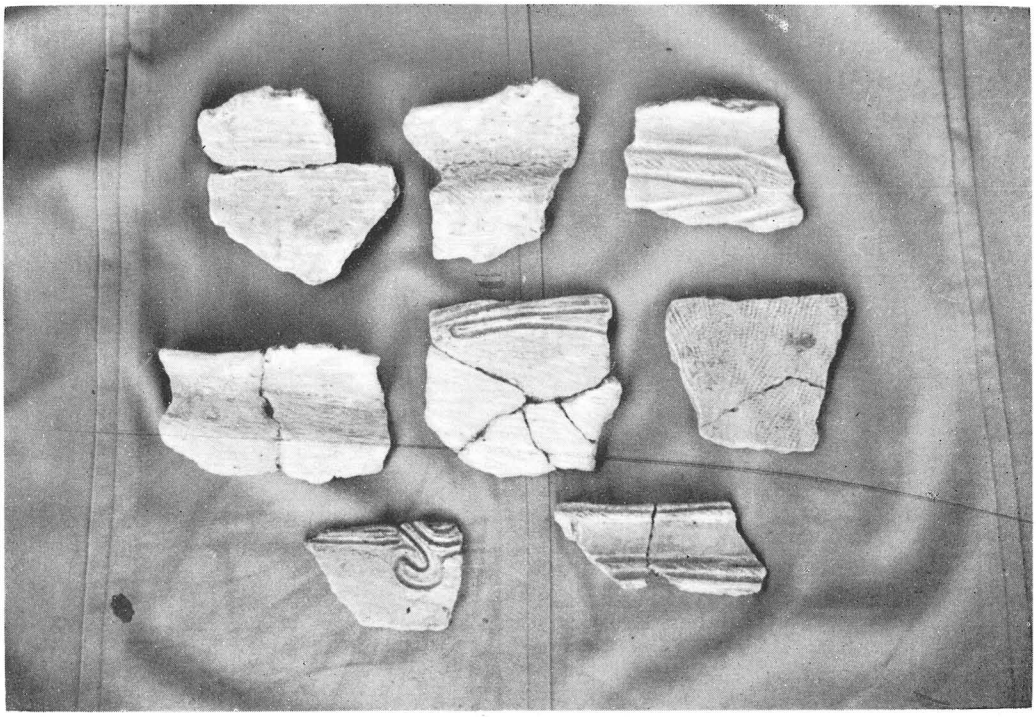
五、大溜遺蹟の發掘

新畑洞穴遺蹟の調査に続いて九月十二日日の影町の大溜遺蹟の発掘調査を行つた。前夜到着された九大助教授鏡山猛氏を迎え興梠町教育長、佐藤常生氏、高千穂高校柳宏吉氏、宮大学生茂山、諏訪両君その他の参加を得て嘗て佐藤氏が遺物を発見した地点、予備調査を行つた地点を中心にトロ道との関係を考慮して発掘地点を撰んだ。

こゝは洞穴遺蹟の側（左岸）でその南方約一キロのところで大菅部落への登り口に当る。丘地が川岸に突出しているトロ道の道路面から二米ぐらいの高さになつている東から西へ下る斜面の地で、地上には周囲五、六寸の雑木が生えていた。もと道路の西端まで下つていた傾斜地を切り取つてトロ道を通したものである。従つて余地がなく、トロの通る度に作業を休まねばならなかつた。



大溜包含層遺物石器



大溜包含層遺物繩文土器

二ヶ所に三米四方位いの地点を選んで発掘したが、土器、石器は地表から一米位いのところに嵌入していた。時間が今日一日しかなかつたのと、曇天が雨模様となり遂に降雨を見るに至つたので、総掛りで発掘して土器、石器の採集に努めた。そして夕方までに発掘した土器、石器は夥だしい数に達し蜜柑箱に三杯となつた。

石器は打製石斧、磨製石斧、石錘、石匙、石鏃材料などで、石錘や磨製石斧の多いことが注目された。土器は包含層だけに大形の破片が多く、種類も非常に多かつた。

こゝの土器は総て縄文土器であるが、先ず器形から言えば、底は平底で、口縁部は甚だ多種類である。口縁部の変化の多いのはその特徴で、素縁かと思うと一部に必ず変化がある。殊にツル通しの耳を有するものが多い。従つて造りは分厚なものが多く、焼成は比較的軟かである。文様は種々あるが、幅広い沈線文が多い。単に沈線文を平行させているものや、沈線文の間に蓆縄文を施したもの、蓆縄文のみのものなど色々あるが、沈線は単に平行しているのではなく、その一部が胴部又は頸部で蕨形や渦巻に似た文様に変化する。その色彩も表面は黒く内面は赤いもの、表面に丹彩を施したようなものなど多種多様である。

六、両遺蹟調査の學術的意義

吾々は如何なる意図をもつて日の影の遺蹟調査を行つたか、そしてその目的は達せられたであろうかということを結論として記したい。もちろん文化財保存の立場から行つた調査であり大溜遺蹟の如きは破壊滅失の近きにあることが虞れられたから調査したのであるが、そうした遺蹟は県下に多数あるが、大溜を選んだのは、それが縄文遺蹟として確実な資料が得られる見込みがあつたからである。縄文土器を使用した人々は吾らの最も古い祖先であるが、従来これをアイヌ族の祖先などと考えられていたゝめ、この研究は放任され勝ちであつた。しかし今やそれが日本人の祖先であるこ

とが明かになつた以上は、これを放任して置くわけには行かない。吾々は文化の本源的なものから調査して行くことが正しい研究だと考える。縄文土器は然し関東地方以北に多く、従つて東京では縄文時代の研究が進んできた。九州に於いては福岡県には殆んどなく南九州に多いのであるが、南九州の縄文土器研究は久しく放任されてきた。それで先ず正しい遺蹟を見出してその学術的調査を進めて行くことは、南九州の縄文文化研究の上に是非必要なことである。然し縄文土器の種類が多いから一部の発掘で、二、三片の破片をもつて論ずるわけには行かない。少くとも数千点の遺物を一遺蹟から掘つて研究せねば正確を期し難いのである。それで出来れば日の影をもつてその一つの柱にしたいと考えたのであるが、右に記した如く両遺蹟とも数千の破片を集め得たのである。これを中心にして研究の歩を進めれば、日向の縄文文化を正確に把握することができるわけである。その意味で今次の調査は非常な成功を収めたものと言えるであろうと思う。

尚お最近東京では縄文土器の編年が行われ多くの名称が附されているが、関東地方の縄文土器と九州のそれとの関連があるか、ないか明かでない今日では、関東地方の例によることができないことは当然で、日向の縄文土器を正確にした上で他との比較関連を行うべきであることは勿論である。最後に新畑洞穴遺蹟の発掘品と大溜のものとを比較すれば石器も土器も非常に異る。そして新畑のものゝ方が古いことは当然である。新畑の土器の連点文は北諸県郡中郷村安久の二股洞穴遺蹟の連点文と一脈通ずるものがあるように思われ、大溜の耳附土器は同町八戸、日向市岩脇のものと関連するところが深いように思うがそれらの結論は将来の研究に俟たねばならない。

（石川恒太郎）

第三部

日向市鈴鏡塚調査報告

第一章　調査の経過

十四日、晴、後小雨。

本日より日向市富高字草場の小円墳を発掘調査する。午前九時、一同墳前に整列修祓。市教育長園田氏、鈴木、小川の諸氏外富高校生徒二十名来援。

本墳は道路面より高さ七、七米径二四米の小墳なれば墳頂より全面調査を行うことゝする。

午前中、墳頂より約一米の東側に斧頭一個を発見す。午後、北側よりヒ翠勾玉二個、ガラス勾玉三個、獣帯八、鈴鏡一（小破径一三、二糎）刀二本、管玉四個（出雲石）鉄鏃、小砥、鞘破片、鉄釘、銀環（破片）出づ。

十五日、晴。

午前中、封土の整理、墳頂より約四〇糎の所に刀一本出で、附近の土中に朱多く交る。午後、勾玉一個（ガラス）管玉四個（出雲石）出づ。

十六日、晴。

午前中、墳北側より鉄片、鉄釘、及び整理中の封土より雙六の采に似たる角形の切子玉一個（水晶）を発見、蓋し、本邦最初の出土品か。

午後墳北側六五糎の地層より小砥一個出づ。

十七日、晴。

午前中、富高高校生徒三〇名来援、復旧作業と共に墳中央部の地層の検出を行うに、新腐蝕土九四糎であつた。

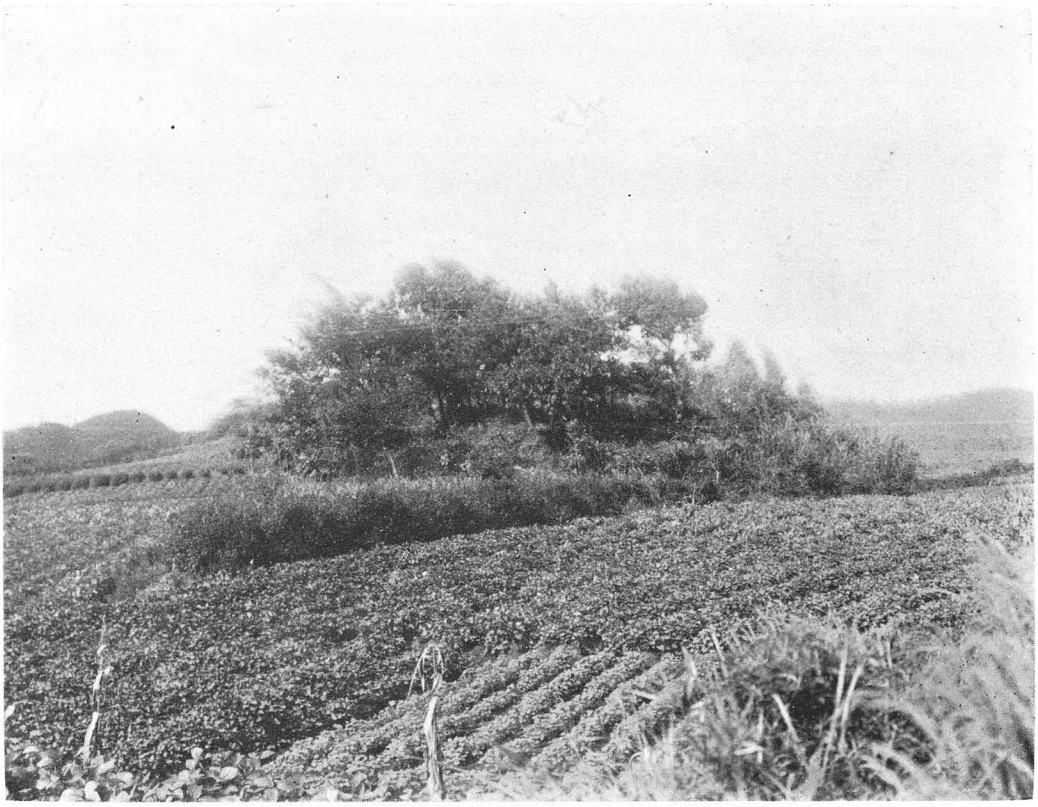
午後一時、全作業終り、旧態に復した墳頂に榊を植え、周囲に出土の礫を繞らし、一同礼拝退散。

本墳よりは祝部土器は殆んど出土せず、埴輪も認め得なかつたが、八鈴鏡、角形切子玉、ヒ翠大勾玉、豪壮なる三本の直刀などを発見したことにより、相当尊貴の人物の墳墓と拝察される。因に鈴鏡は全国的に五十八枚が挙げられるが日向では第三番目の出土である。（終）

第二章　調査の経過

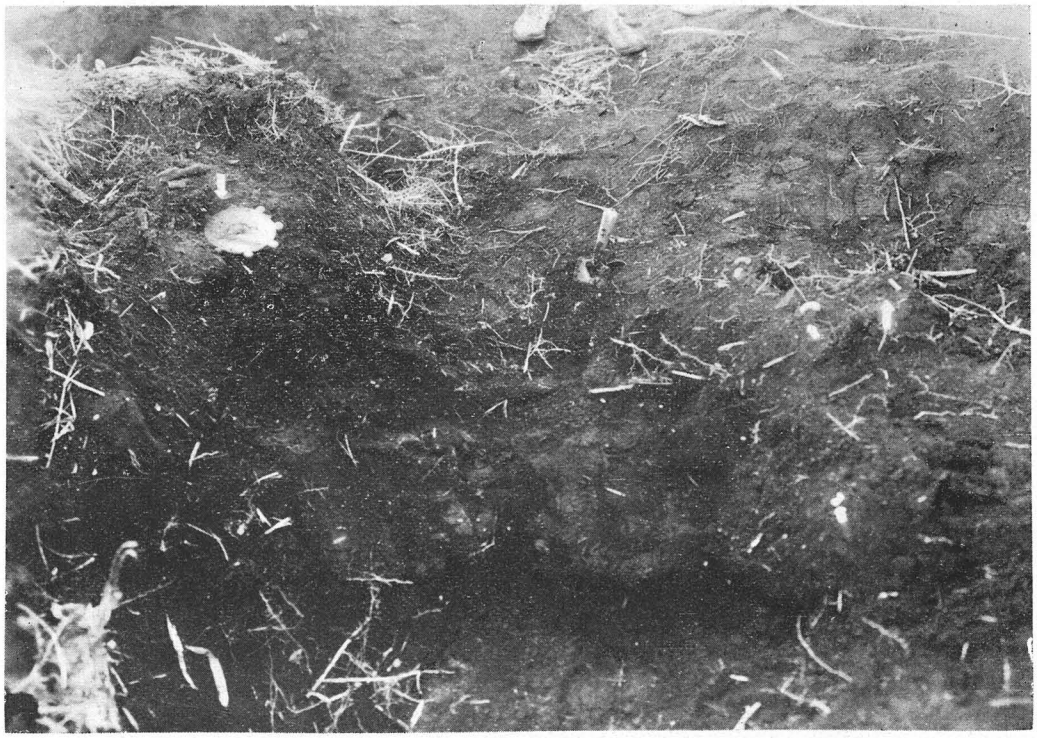
一、所在と附近の状況

鈴鏡塚と名ずけられたこの古墳は日向市大字富高字草場の台地上にある。日豊線富高駅の西方北寄りに一連の台地があり、その南縁に近い丘の上に若宮神社が鎮座せられている。この神社は円墳上に建てられているのであり、この円墳はこの台地上の最大の古墳である。若宮神社の西側に、これと対立するかの如く一基の前方後円墳がある。筆者はこの町に育つたものであるが嘗て少年時代（大正初年）に手塚鉄骨という鉱山師が来てこの前方後円墳を発掘して鎧、兜刀などを掘り出したことがあつた。若宮神社の東側にも一基の円墳があるが、これも嘗て盗掘されたということで、中央部が少し凹んでいる。鈴鏡塚はその北方約三百米のところにある円墳であるが、この附近には尚お多くの古墳があつたものと思われるが、既に開墾削平されて形を失つたものが多いようである。鈴鏡塚の西側に円墳の形を半ば残し既に上部は削平されて作物が植えられているものがあり、塚のすぐ南側の電柱の立つているところから嘗て刀が掘り出されたと地方の人が語つているから、こゝにも一基の円墳があつたものと思われる。更にこの丘地の東縁に近く一基の円墳



草場古墳全景

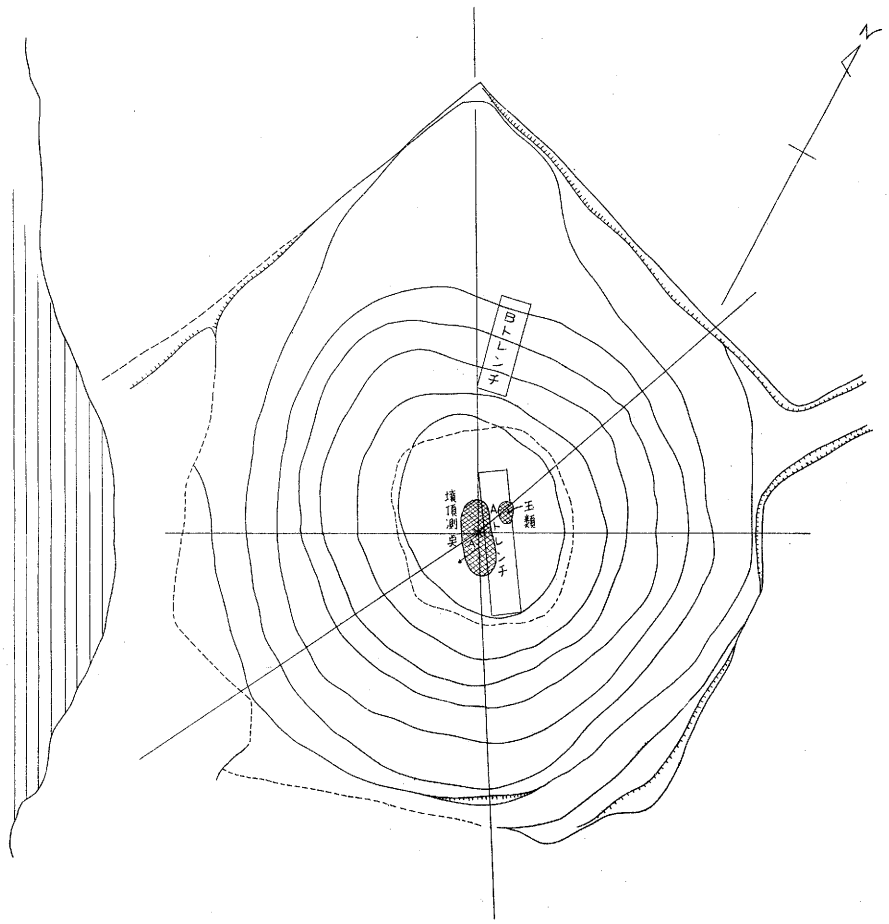
曲玉、管玉出土状況



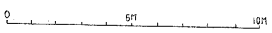
鏡　出　土　状　況

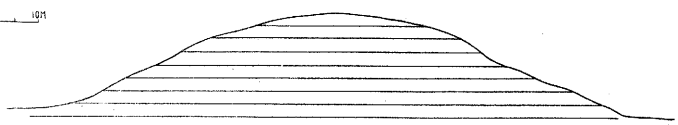
鏡　出　土　状　況

日向市草場古墳実測図

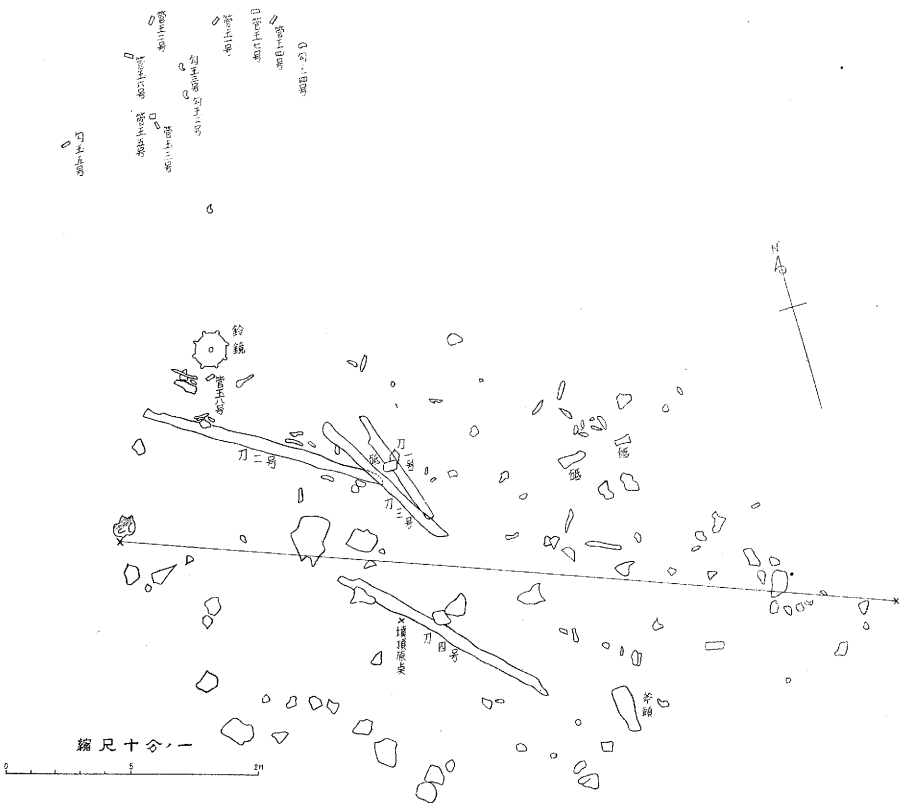


縮尺 百分ノ一





日向市草場古墳遺物出土狀況実測図



があるが、もとこゝにも尚お数基の円墳があつたのを覚えている。多くは戦争中に丘地の土を取つた際兵隊によつて壊されたのであつた。

これらの古墳の中で鈴鏡塚は形は余り大きくはないが、最も整然たる形を残していた。墳上には目通り一尺内外の松栗などの樹が生え竹が密生して藪状をなしていたが、丘頂に立てば、日向市の市街地を眼下に視、東方は細島港を指呼の間に望む風光絶佳の位置を占めている。

この古墳は同市富高新町の日高氏の所有地で、これらの墳上の樹木は先代の日高兵吉氏が古墳の盗掘を防ぐために植えられたのであるということであつたが、発掘した結果から見れば、若しこの墳上の樹竹が無かつたならば、たとい盗掘を免れ得たとしても、風雨に洗われて恐らく遺物は残つていなかつたであろうと思われた。

この円墳は直径二十米内外で北から南に下るゆるやかな丘地にあるので、高さは北側で地表上七米、南側は八米あつた。周囲は畑であるが、大体完全に近い形で残されていたのは所有者が町の有志であつたのと古墳に対する畏敬心とによつたものと思われる。

二、發掘の經過

この円墳は初め予備調査を行つた時は小さい古墳と思つたが、測量のため竹藪を伐り払つて見ると、思つたより大きいのに驚ろいたが、幸いにして富島高等学校の向高校長の好意で、同校生徒二十名以上が作業に参加されたので非常に捗つた。調査団一行は九月十三日、日の影から現地に着いたが、当日は日曜で且つ降雨があつたので作業を休み、翌十四日と十五日の二日間発掘をなし十六日復旧作業を行つたのであつた。こゝの発掘調査は十四日午前九時から野村県教育長の鍬入式を以て開始したが、鏡山、吉野、石川等調査員の外に別府女子大学の賀川光夫氏、市教育委員会の園田教

育長、河野勝、市弘報係長鈴木義明の諸氏、富島高校小川教官、同校学生、宮大生茂山、諏訪両君等多くの人々の参加を得た。

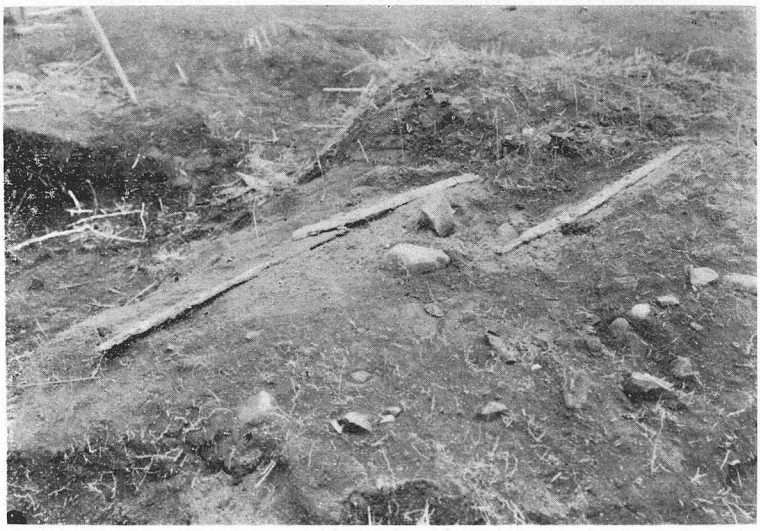
切め中央部に東西にトレンチを入れようかと思つたが、古墳が小さいので全体を表面から剝いで行くことに変更し、先ず墳頂の測量基点を中心に頂上部を直径八米位いにして立木から立木に縄を張り、東側の半円形を外側から中心に向つて木や竹の根を除く程度に浅く掘り進んで行つた。

大体最初こゝの古墳の棺は何であろうかと考えたのであるが、嘗て若宮神社西側を手塚鉄骨氏が掘つた時も棺の話は聞かなかつたし、この古墳の南側からも刀が出たのみであり、大きな石のあつたことは嘗て聞いたことがないばかりでなく、この台地には余り大きな石は見当らないから恐らく粘土棺であろうと思つたので、作業に参加した高校生にも粘土に注意するように話したのであつた。然るに東側に於いて粘土質の土が出たのでそこを残して掘り進んだ。すると南側の表土に近い所から大形の斧頭が一個見出された。然しそれは余りに埋没が浅いので非常に疑問視したのであつた。

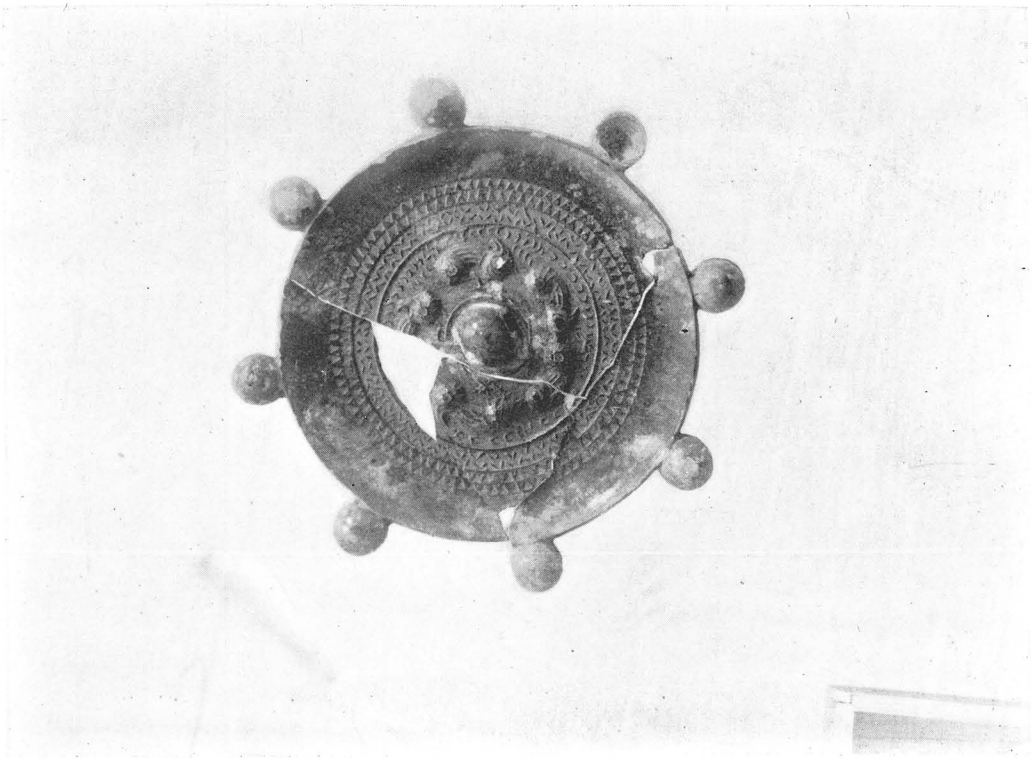
ついで西側の半円を右の如く、円周から中心に向つて掘り進んだ。すると西側に於いて又粘土質の土があることを認めたが、そうするうちに北側で勾玉が発見されたので、いよ／＼既に棺底に達していることが知られた。即ち最初斧頭が発見された位置は墳頂原点から東東南一米の地点で、勾玉（一号）のあつた地点は原点の北方一米八〇の地点であつた。それでその附近を精密に調査すると、それから北方四〇糎から八〇糎の地点で勾玉、管玉などが一団となつて現われた。又原点より北方一米三〇の地点に鈴鏡一面があり、一部は破れて飛んでいたが、残りは動かずに地中に嵌入していたので、この鏡の位置は棺底であることが知られた。それは地表下僅かに三三糎の位置であつた。それで綿密にその附近を発掘すると、鏡の南西に接して管玉一個があり、その東に鉄鏃一本、その東方五〇糎を隔てゝ刀一振が北側を下

砥石出土状況

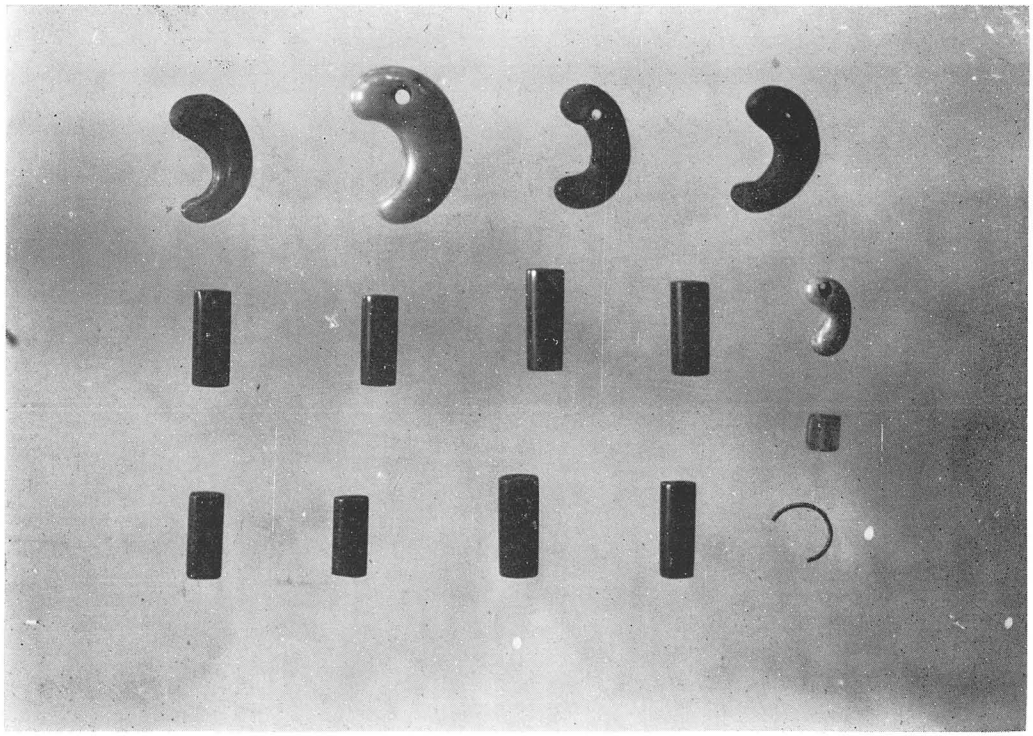
刀出土状況



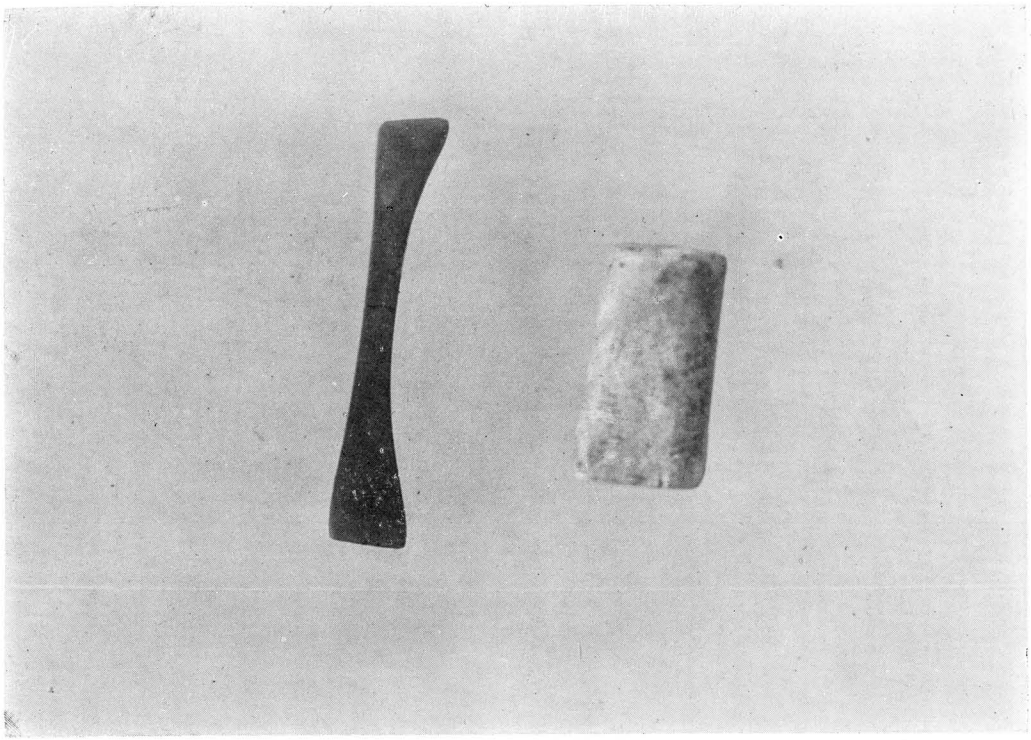
刀出土状況



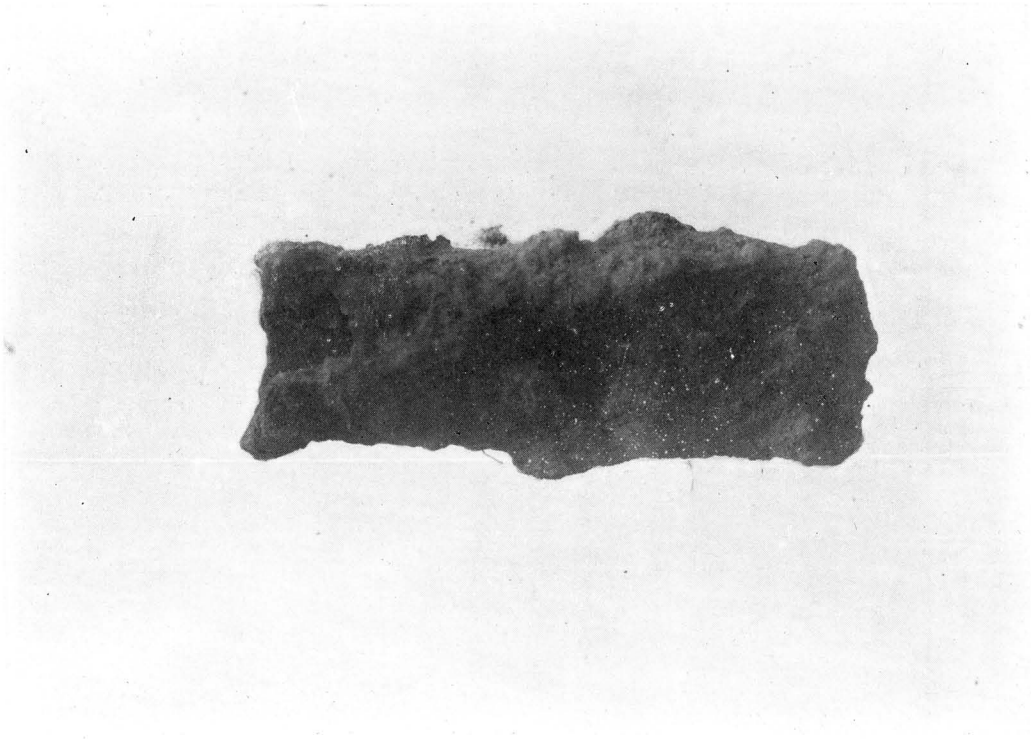
八　　鈴　　鏡



曲玉、管玉、銀環、切子玉



砥　　石



斧　　頭

にして斜に入り、柄を北に刃を西にして見出された。

更に南方に掘り進んだが埋没が浅いため、竹の根が縦横に入つていて作業は困難を極めた。然し鏡の南方にほゞ東西に刀が一本あり柄を西に刃を北にして入つていたが、その位置は墳頂原点から鋒（きっさき）が北方五五糎、茎（なかご）の尻は一米三〇の点であつた。更にその刀の鋒を中心とし刃を南にして一本の刀があり、この刀は前に柄を北にして入つていた刀と先端で重なつていた。この刀の附近には鉄鏃や鉄片があり、この最初の刀の下に砥石が一個あつた。それから墳頂原点に接して北西から東南に向つて一本の刀が茎を西方に、鋒を東方に、刃を北にしてあつた。しかもこの刀の下には石が二個敷いてあつた。また墳頂原点の東北方九〇糎の所に砥石が一個、その東方に一三糎隔てゝ更に砥石が一個あつたが、この二個は接合して一個となる。またこの附近には鉄片や鉄鏃が散乱していた。

たゞこゝに不思議なことは以上に述べた鏡以下のものは同一の面上に存在したが、勾玉や管玉のあつた面はこれと異り、玉類の存在した深さは地表下八〇糎で遥かに深く這入つていた。鏡や刀のあつた面上には大小の石があつたが、これらの石について注目すべきは南側の部分で、こゝには石の列が多少見られた。これは北側にこうした石がないことゝ対照して見なければならない。

玉類のあつた位置が五〇糎も深いので念のために、最後に全部堀り下げて見たが、下は地盤であつた。図によつて知られる如く、遺物の状態は多少乱れていることが看取された。

更らに古墳の北側斜面に幅一米、長さ四米のトレンチを麓から上方（南北）に向つて入れて盛土の状況と葺石を調べたが、葺石は認められなかつた。

三、發掘の遺物

この古墳から発見された遺物は鏡、玉、耳飾、刀、鉄鏃、斧頭、砥石、鉄片等であつた。これらの遺物について詳記すれば次の通りである。

A、鏡

鏡は一面で八鈴鏡であつた。青銅製で破損しているが、接合すれば完全となるものであつた。鏡の直径一三糎三で丸鈕、鈕座の直径二糎五、鈕の高さ〇糎八で、厚さ〇糎一、縁の厚さ〇糎四である。文様は素文縁の内側に鋸歯文帯が二列あり、その内側に波状文帯があり、その内側に獣文が描かれているが、獣文は五つで相当に模様化している。鏡縁の鈴は八個で、振れば妙なる音を発する。従つてこの鏡は獣文八鈴鏡である。その鏡背の文様は国立博物館蔵上野国出土の獣文七鈴鏡に似ている。八鈴鏡の出土は日向に於いては最初のことである。

B、玉　類

玉類は勾玉、管玉、切子玉であつた。

勾玉は五個で、そのうち最大のものと最小のもの、二個はヒ翠、他の三個は硝子製であつた。最大のものは長さ四糎五、胴部の幅一糎八、厚さ一糎五であつた。最小のものは長さ二糎三、胴部の幅〇糎七で、穴は片側が大きく一方の側には二つあり一つは貫通し他は貫通していない。即ち一度穿つたのが見当が違つたのであろう。他の三個は硝子製で、そのうち二個は頭部が大きく、他の一個は尾部の曲りが大きく形が整つている。これは長さ三糎五で胴部の幅一糎一、穴は両面から掘られている。他の二個は長さ三糎六、胴部の幅一糎三と、長三糎六、胴部の幅一糎二で何れも一方から穴が穿たれ、殊に後者の穴は細くして殆んど平均している。

管玉は総数八個で何れも出雲石製である。長さ三糎、幅一糎一内外である。

切子玉は水晶製で正六面体、即ちサイコロ形で中央に穴がある。高さ一糎、幅〇糎九である。この種の形の玉の出土は他に類が少い。

C、耳　飾

銀製の細いもので円形であつたのが破損している。唯一個で、玉類と混じて出た。極めて細いので他の一個は見失われたのであろう。

D、刀

刀は比較的完全で四個であつたが、接合して三振となつた。鏡に近くその南側にあつた一振は総長九八糎、茎の長さ七糎五、身幅四糎七、角棟で厚さ一糎、勿論真刀で鋒はふくらついている。最初に発見した短い一振とそれと先端が交叉していた今一振の短いのとは接合して一振であつたことが知られた。これは総長一米一二糎、茎の長さ一〇糎五、身幅五糎角棟の厚さ〇糎八、鋒から八糎五の所が折れているが鋒は豊かな外曲線を描いている。第三の墳頂原点に接してあつた一振は総長一米二〇、茎の長さ一二糎七で、身幅四糎五、角棟の厚さ〇糎八である。鋒は折損しているようである。

以上の如く刀は三振であるが、素晴しく長く且つ丈夫に出来ている。

E、鉄　鏃

鉄鏃は二十一本を数えることができた。大小形状種々であるが、比較的大形で、片刃根の刀先形、両刃の剣光形、平根などであつた。

F、斧　頭

斧頭は総長一七糎五、身幅六糎、袋穂の長さ七糎、高さ五糎五で、袋は両側面から曲げ込まれて出来てをり、厚さ〇糎四で刃渡りは六糎五ある。斧頭はこの一個であつた。

G、砥　石

砥石は二個であつたが、一個は長さ七糎、幅四糎、高さ三糎五で、初めは骨ではないかと思われた位いで黄色い表面の滑らかな石である。他の一個は中央から二つに折れている。総長一三糎、幅二一糎、高さ二糎五、最低の中央部〇糎三で、細いものであり又相当に磨滅していた。

H、鉄　片

鉄片は多数あり、鎧の破片のようなものが多く、鉄鏃の破片などが混じている。

以上がこの古墳から出土した遺物であつたが、日向遺蹟調査団としては、三年目に初めて遺物の豊富な古墳に遭遇したもので、小さな古墳としては意外に遺物が多かつた。

四、棺その他について

発掘の結果は以上の通りであるが、こゝに疑問の点が一、二存在する。それは前に記したように、鏡や刀のあつた面と玉類のあつた面とが深さにおいて五〇糎から差があつたという事実がその一つである。これは如何に考がゆべきであろうか。この疑問に対しては発掘によつて知られた事実に基ずいて考がゆべきであるが、先ず最初に発見された刀が北を下に傾斜していた事実に注意せねばならない。このことは、この古墳の北側が何かの作用で陥没したことを示している。勾玉や管玉などは鏡の中心から一米位い北方に在つたが、これらの玉類はもと、もう少し鏡の近くにあつたであろうことは、管玉の一個が鏡の南側にあつたことで知ることができる。しかし位置が隔つてはいるが、玉類は余り散乱

せず一団となつて存在したから掘り返されたものとは考えられない。発見された管玉の数は八個で、一個の長さ三糎位いであるからこれを繋ぎ合せると二四糎となる。それに勾玉が五個であるからこれを貫くとして平均の厚さ一糎として五糎で、管玉と加えて二九糎となる。玉と玉の間隔を〇糎五置けば三五糎となり、首の周りに掛けるものとしては、玉が不足しているとしても僅かであると思われる。これらの諸点から見て鏡の北部から土地が北側に陥没したものと見るべきであろう。

次ぎにこの古墳の棺は何であつたかという疑問である。大きな石は一枚もなく、従つて石棺でないことは明らかである。又同市伊勢ヶ浜に多くある石槨式でも勿論ない。前に述べたように、刀の南側に余り大きくない石の列があること小石が割合多いこと、粘土質の土があること等から考えて粘土棺であつたと見ることが妥当ではないかと思う。

遺物配置の状況は鏡が北にあり、三本の刀は何れも茎を北に鋒を南に向けて置かれていた事実は、この棺に葬られた人は頭を北に、足を南に向けて仰臥されていたことを示すものと思われる。遺物の配置は乱れているが鏡は胸のところに刀は両側に、玉は首の位置にあつたことは勿論であるが、大体に遺物は北方に動いていることが知られる。このような小さい古墳で、しかも丘地の上に突出しているものは風雨によつて上部の封土を洗い流されることが激しいわけである。従つてこれらの遺物が地表下三〇糎の浅い位置にあつたことは、封土が殆んど洗い流されてしまつた結果であつてそれは又一つには粘土棺であつたから、一層風雨に冒されることがひどかつたわけである。刀や砥石が折れていたのも封土が削平された結果で、この古墳は遺物が地上に露出して人々に踏み折られ雨で流し去られる一歩前にあつたものというべきである。

斧頭の位置は動いていると思われるが、南方の刀の尖端から鏡の北端まで二米ある。鏡は動いていないと思われるか

ら、その北に玉があり、その位置を首と考えれば、棺の内側の長さは三米位い、南側の刀と北側の刀との外側の間隔が七〇糎あるから棺の内側の幅は一糎位いあつたものと想像される。尚お墳頂原点側の刀の下にあつた石その他諸所に朱が認められたから棺の内側に朱が塗られていたものと思われる。

この古墳の遺物は極めて優秀なもので、八鈴鏡は全国的に出土例が極めて少い遺品であるが、それが割れてはいても完全形で発掘されたことは、古代日向の文化研究に貴重な資料を加えたものである。勾玉もヒ翠のものは極めて大形であり、又切子玉の形の珍らしさも他に例を見ない。刀にしても一米を越える長さで且頑丈な作りである。これらの遺物によつてこゝに葬られた人物を想像すれば、刀から見てそれは腕力秀でた逞ましい武人であつたことが想像される。また大形の鉄鏃から見ても強弓をひいた人であることがわかる。しかも鈴鏡を有したことは、鈴の音色と思い合せて一面の優しさを示している。又玉の色が緑や白を好んだことは清浄にして崇高な性格を象徴するかに感ぜられる。

最後にこの古墳の年代を知るためには、八鈴鏡が最も重要であつて、鈴鏡は日本で製せられたもので、多く祭祀に用いられたと言われているが、こゝのは獣文八鈴鏡であるから、今から千四百年位い前のものと見ることができるであろう。

なおこれらの遺物は全部県立博物館に保管を依頼した。

昭和三十年四月十日　印刷兼発行

【非売品】

発行所　宮崎県教育委員会

宮崎市旭通二丁目二二番地

印刷所　藤屋印刷所

電話四四五二番